

# 澄心寺下遺跡

—緊急発掘調査報告書—

昭和55年

箕輪町教育委員会

# 澄心寺下遺跡

昭和55年

箕輪町教育委員会

## 序文

三日町上棚地区の農業基盤整備事業に伴なう、埋蔵文化財緊急発掘調査の報告書である。

御射山第一・第二遺跡は既に報告したが、この遺跡は福与大原遺跡と共に竜東地区を代表する遺跡である。

出土した遺構は縄文時代後期と古墳時代の二つの時期であり、これらの遺構は今まで箕輪町内の発掘では見られない特色があった。それは調査地区内に多数の配石遺構があり、祭祀用と考えられる土器が多く出土したことにより、祭祀的な遺構と考えられることである。

出土遺物は、縄文時代早期から平安時代までは続いている。

調査は柴学芸員を中心にして夏休み中の高校、大学生及び地元の作業員の方々の協力を得て、綿密に進めた。

本報告書作成に当り、関係各位に厚く御礼を申し上げます。

教育長 橋口彦雄

## 凡　例

1. この調査は、箕輪町三日町上柳地縁の農業基盤整備事業に伴うものであるため、事業着手前に調査を完了する必要上緊急の記録保存事業とした。
2. 調査の結果については、検出された遺構、遺物を多く図版にすることに主眼をおき、文章記述は簡略とした。
3. 遺構・遺物実測図等の縮尺には数字やスケールを入れて示してある。
4. 本報告書掲載の遺物、実測図、写真類は箕輪町郷土博物館に保管してある。
5. 本報告書の執筆者及び図版製作者は次のとおりである。
  - 本文執筆者 林茂樹・柴登巳夫・竹入洋子・北条芳隆
  - 図版製作者 土器・石器の実測、土器拓影、遺構実測図  
馬場保之・中村哲二・柴登巳夫・竹入洋子・古屋公彦
  - 写 真 摂 影 林茂樹・柴登巳夫
6. 本報告書の編集は主として箕輪町教育委員会があたった。

# 目 次

序 文

目 次

挿図目次

図版目次

表 目 次

第 I 章	遺跡の立地.....	1
第 1 節	位 置.....	1
第 2 節	自然環境.....	2
第 3 節	歴史的環境.....	3
第 II 章	発掘調査の経過.....	5
第 1 節	発掘調査に至るまで.....	5
第 III 章	発掘調査の結果.....	8
第 1 節	基本層序.....	8
第 2 節	縄文時代の遺構.....	10
	1. 住居址.....	10
	2. 配石址.....	11
第 3 節	古墳時代の遺構.....	11
	1. 住居址.....	12
	2. 遺物集中区.....	12
	3. 配石址.....	13
第 4 節	その他の遺構.....	17
第 5 節	縄文時代の遺物.....	18
	1. 土 器.....	18
	(1) 早期土器.....	18
	(2) 土器拓影（前期・中期・後期・晚期）.....	19
	(3) 第 1 号住居址及び第 1 遺物集中区出土土器.....	20
	(4) 土製品.....	21
	2. 石 器.....	26
	(1) 小型定形石器（石鎌・ドリル・石匙）.....	26
	(2) 小型不定形石器（スクレイバー）.....	30
	(3) 大型定形石器（打製石斧・石鎌・磨製石斧 凹石・磨石・石核）.....	44
第 6 節	古墳時代の遺物.....	49
	1. 土 器.....	49
第 IV 章	まとめ.....	55

## 挿図目次

第 1 図	位置図	1
第 2 図	遺構周辺の地形	2
第 3 図	周辺遺跡分布図	4
第 4 図	周辺地形実測図	7
第 5 図	遺構全測図	8
第 6 図	基本層序	9
第 7 図	第 1 号住居址実測図	10
第 8 図	第 6 配石址実測図	11
第 9 図	第 2 号住居址実測図	11
第 10 図	第 1 遺物集中区実測図	12
第 11 図	第 1 配石実測図	13
第 12 図	第 2 配石実測図	14
第 13 図	第 8 配石実測図	14
第 14 図	第 3・4 配石実測図	15
第 15 図	第 5 配石実測図	16
第 16 図	第 7 配石実測図	16
第 17 図	土溜実測図	17
第 18 図	土器拓影 (1)	18
第 19 図	土製品実測図	18
第 20 図	土器拓影 (2)	19
第 21 図	縄文式土器実測図 (1)	20
第 22 図	" (2)	21
第 23 図	石器実測図 (1)	22
第 24 図	" (2)	23
第 25 図	" (3)	27
第 26 図	" (4)	28
第 27 図	" (5)	29
第 28 図	" (6)	30
第 29 図	" (7)	34

第 30 図	石器実測図 (8).....	35
第 31 図	" (9).....	36
第 32 図	" (10).....	37
第 33 図	" (11).....	38
第 34 図	" (12).....	39
第 35 図	" (13).....	40
第 36 図	" (14).....	41
第 37 図	" (15).....	42
第 38 図	" (16).....	43
第 39 図	土器実測図 (1).....	48
第 40 図	" (2).....	49
第 41 図	" (3).....	50
第 42 図	" (4).....	51

## 図版目次

第1図版	発掘区全影
第2図版	遺構状況 (1)
第3図版	" (2)
第4図版	" (3)
第5図版	" (4)
第6図版	" (5)
第7図版	遺物出土状況 (1)
第8図版	" (2)
第9図版	調査風景
第10図版	出土遺物
第11図版	出土石器 (1)
第12図版	" (2)
第13図版	出土土器
第14図版	出土土器 (1)
第15図版	出土土器 (2)
第16図版	出土土器及び土製品、記念撮影

## 表目次

第1表	小型定形石器 その1 .....	24
	" その2 .....	25
第2表	小型不定形石器 その1 .....	31
	" その2 .....	32
	" その3 .....	33
第3表	大型定形石器 その1 .....	46
	" その2 .....	47
第4表	出土土師器一覧表 .....	52~54

# 第Ⅰ章 遺跡の立地

## 第1節 位

### 置(第1図)

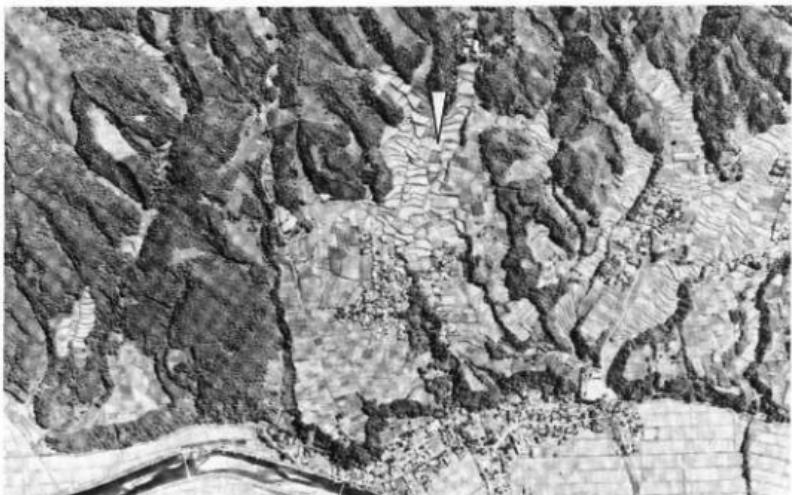
澄心寺下遺跡は、長野県上伊那郡箕輪町大字三日町63-1番地に所在する。西に面してかなりの傾斜を呈した扇状地上に位置している。国鉄飯田線木下駅の北東約1kmほどにあり、箕輪町を一望にできる所である。遺跡の名前の出所である澄心寺は曹洞宗の名刹で標高770m前後である。眼下を流れる天竜川との比高約120mを計る。



第1図 位...置 図

## 第2節 自然環境

箕輪町は上伊那郡の北部に位置し、南流する天竜川によって二分され、竜西・竜東の二地区に分けて呼ばれている。竜西地区は木曽山脈北部の経ヶ岳山塊に属する黒沢山(2126)、烏帽子・桑沢山(1538)に続く山地帯と、その山麓に形成された雄大な扇状地とそれに続く河岸段丘を経て天竜川に達している。竜東のそれは、天竜面にすぐ引き続いて河岸段丘が形成され山麓に位置する小規模の扇状地が並び、一気に伊那山脈の前山の高原から高雄山(1205)、三ツ峰(1391)に連っている。箕輪町の地形においての大きな特徴は扇状地と河岸段丘に見られると思う。竜西地域を形成する扇状地は東流する小河川によってできたものであり、それ等の川は、北から、北の沢川、桑沢川、帝無川、大泉川と続いている。これ等の河川によって形成された扇状地は、南に行くほど雄大である。対比する竜東地区は氾濫原に接する段丘面から上位段丘の規模は小さく、変化の多い小規模な扇状地がすぐ山地帯に続いている。又、山が急で河川の流れが早いため「天井川」のような特徴ある地形も見える。扇状地は小河川、湧水などによって順次侵蝕され、その度合は下流(西方)に行く程進んでいる。残された面はロームに覆われ、多くは畠地、及び村落のある台地となっている。このように東西の地形も大きな相違を見ることができるが、山麓を覆う岩石も異なっている。西方のそれは、粘板岩、礫岩、チャートなどを混在する領家変成岩類に属する片状ホルンフェルス帶である。東方の山地は花崗岩、閃緑岩、結晶片岩類であり、遺跡一帯は花崗岩の風化した砂土が層をなしている。遺跡の所在する地形は、西に傾斜する扇状地最上部にあり、まさに箕輪の地を一望にできる遠望の開けた所である。南と北に山があり凹地の斜面に位置する一帯は絶好の居住地帯であったと思われる。



第2図 遺跡周辺の地形

### 第3節 歴史的環境

箕輪町は天竜川をはさんで典型的な河岸段丘が形成され、竜東地区は変化に富んだ扇状地や段丘面が形成されているため、遺跡分布の濃厚な所として知られている。とくに上伊那郡唯一の前方後円墳の「王墓」、天竜川を隔てて対峙する長岡古墳群との関係、昭和27年からの土地改良工事によって発見された「箕輪遺跡」の木器・木柵は、古代水田跡解明の貴重な資料である。又、昭和47年に発掘調査された「北城遺跡」は、弥生後期の大集落の一画と中世火葬墓群を発見し、この地域の特色の一端を物語っている。

さて遺跡のすぐ周辺に目を向けてみると、一帯は先史より、近世に至るまでじつに豊富な資料をえている。本遺跡からも出土した縄文早期の押型文土器を伴う遺跡が何ヶ所もあり、町内の早期遺跡の大半がこの三日町、福与地域で占められている。昨年発掘調査を行なった御射山遺跡は縄文中期の集落の一部と、大規模な柱穴列址が発見され、出土遺物にも見るべきものが多いすばらしい遺跡である。又、御射山遺跡のすぐ南には前期土器を出土している田畠遺跡があり、上棚部落へと続いている。ここ一帯は段丘突端に至るまで各時代の遺跡が分布している。特に黒曜石片の多いのが注目される(注1)。又、東方山頂に位置する萱野遺跡も早期土器や石器を出土している(注2)。遺跡の東斜面半ばには天王塚と呼ばれる古墳が一基ある。この古墳は戦後庭石にする目的で、石室の石が運び出され、現在ではわずかに残った石などから形を想像することができる。塚の中に10m四方に約50cmほど高くなっている。上棚部落の中にも一基あり、これは、「おしりよう様」と呼ばれている。ここもわずかに石が三つほど顔を出しているにすぎず、古墳の形態はほとんど留めていない。又、本遺跡の北の小高い場所に御射山社が祭られている。(注3)

注1) 土地の人々は多く落ちている畑のことを「星クソ畑」というような呼び方をしている。昔から黒曜石片のことを、星のかけらとか、星クソと呼んだことからこういう名がついたものであろう。

注2) 萱野遺跡は昭和38年秋に箕輪町教育委員会により、故藤沢宗平氏を团长として発掘調査された。遺物は縄文時代早期の押型文土器、田戸下層式土器、石鐵、磨石等が発見された。遺物は箕輪町郷土博物館に展示されている。

注3) 御射山三社の本社は皆沢家(神職)のすぐ上にあり、その場所を古米(神府、又は御室)と呼ぶが、9月の例祭はこの神府社と箕輪南宮神社秋宮の神体とを神輿で三日町上棚東方の山麓にある御旅所に遷して行なわれる。これを穗屋御狩の神事という。

箕輪南宮神社にある神体は9月の例祭に御旅所へ上って御射山三社の祭神のうちに加えて祭りが行なわれ、12月27日の夜、御神渡神事によって木下の春宮に遷され、7月の南宮神社の夏祭以後また秋宮に遷される。



第3図 周辺遺跡分布図

- |          |            |            |           |        |        |        |
|----------|------------|------------|-----------|--------|--------|--------|
| ●澄心寺下    | ②田 煙       | ③天王塚古墳     | ④むしりょう様古墳 | ⑤御 射   | ⑥小 学 校 | 森原山出口敷 |
| ⑦鹿 壇     | ⑧石 仏       | ⑨大 原       | ⑩矢 田      | ⑪上     | ⑫黒 藤   |        |
| ⑬箕 輸     | ⑭猿 来       | ⑮南 城       | ⑯北 城      | ⑰上     | ⑱藤 大   |        |
| ⑯中 山     | ⑯本 城       | ⑰王 墓 古 墳   | ⑱堂 地      | ⑲中     | ⑲大     |        |
| ㉑十 津 坡 下 | ㉒羽場の森三号古墳  | ㉓羽場の森二号古墳  | ㉔羽場の森一号古墳 | ㉕中     | ㉖ま せ 屋 |        |
| ㉓直 路     | ㉔久 保 煙 古 墳 | ㉕上 の 平 古 墳 | ㉖上 の 平    | ㉗日 の 向 | ㉘敗     |        |

## 第Ⅱ章 発掘調査の経過

### 第1節 発掘調査に至るまで

本地区は箕輪町の天竜川左岸台地上に所在する三日町上棚地籍で、水田および畠地帯である。地区一帯は水田と畠が点在し、排水の悪い湿田が多く、区画も不整形で、小区画であり農業機械の導入にも支障をきたしている現状であった。このような現状を開拓するため又、水田の多目的利用のための乾田化ということも合せて計画されたのである。そして農業基盤整備事業圃場整備上棚工区として事業が計画され昭和54年度から進めているのである。基盤整備地区内には何ヶ所かの遺跡が確認されていたため54年度から発掘調査の計画を進めた。54年度には御射山遺跡を二ヶ所調査したのである。55年度に入り本遺跡の所在する位置にも基盤整備事業が進み発掘調査を計画しなければならなくなつた。5月より数回にわたり現地踏査を実施した。その段階において本遺跡の調査地区を決定し表面採集を行なつた。その結果、調査予定地区内における遺跡の予想を繩文早期及び奈良平安時代の遺跡であろうと判断した。以後県教育委員会文化課の指導のもとに調査計画内容を検討し、諸届を済ませた。7月中旬から日本考古学協会会員林茂樹氏を調査団長とする調査團を組織し、記録保存を目的とした緊急発掘調査を実施する運びとなつたのである。

#### イ. 調査團

團 長	林 茂樹	日本考古学协会会员
調査主任	柴 登巳夫	箕輪町郷土博物館学芸員
調査員	小池 幸夫	静岡大学学生
"	木下 久	立教大学学生
"	北条 芳隆	岡山大学学生
"	福沢 幸一	中央道調査員
参 与	馬場 瞎一	箕輪町教育委員会教育委員長
"	原 茂人	箕輪町教育委員会教育委員長職務代理
"	戸田 宗十	箕輪町教育委員会教育委員
"	桑沢 良平	箕輪町教育
"	春日琢磨	箕輪町文化財保護審議会委員長
"	荻原貞利	箕輪町文化財保護審議会委員
"	星野 和美	"
"	矢沢喬治	"
"	市川脩三	"
"	小川守人	"
"	堀口貞幸	"

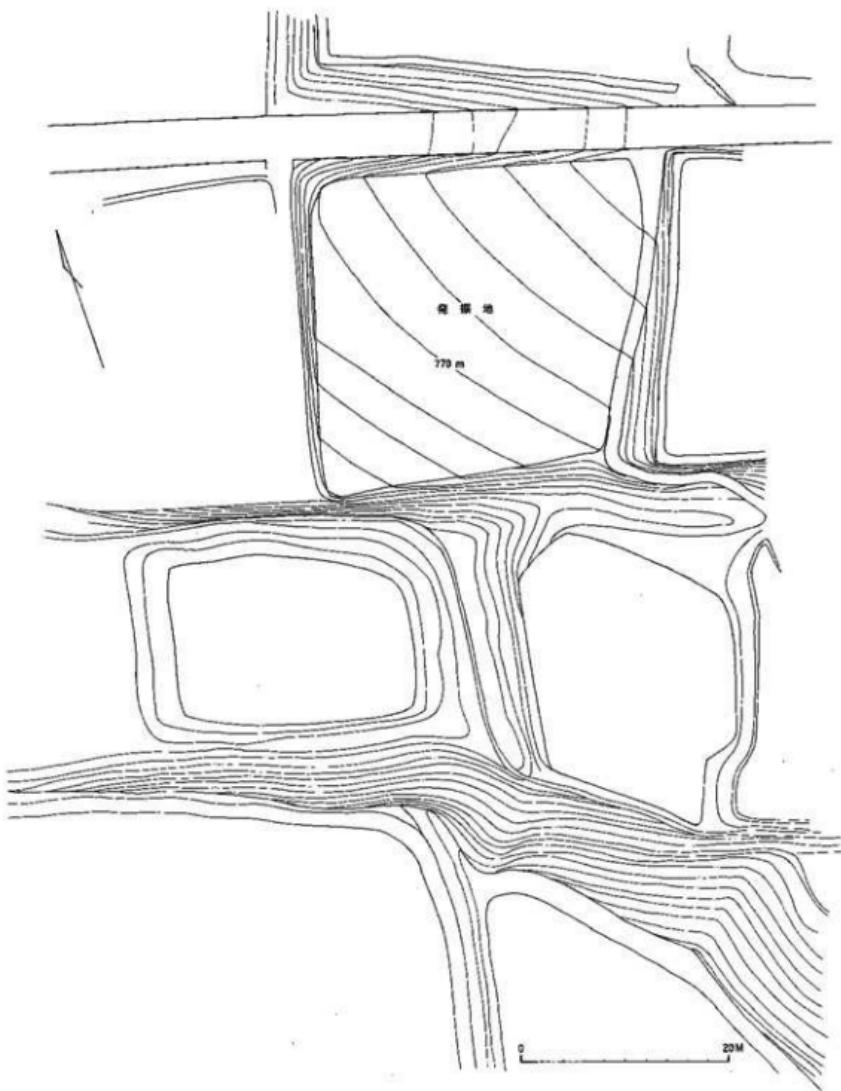
上田晴生 箕輪町文化財保護審議会  
 藤田寛人  
 事務局 楢口彦雄 箕輪町教育委員会教育長  
 \* 唐沢行明 \* 教育課長  
 太田文陳 \* 社会教育係長  
 中村文好 \* 社会教育主事  
 柴登巳夫 箕輪町郷土博物館学芸員  
 竹入洋子 \*

遺跡調査会調査会長  
 市川脩三 箕輪町文化財保護審議委員  
 理事 萩原貞利 箕輪町教育委員会社会教育指導員  
 \* 細井武人 \*  
 \* 大根剛 箕輪町誌編纂委員  
 監事 小林重男 箕輪町郷土博物館専門調査委員  
 \* 堀口貞幸 箕輪町郷土博物館協議委員

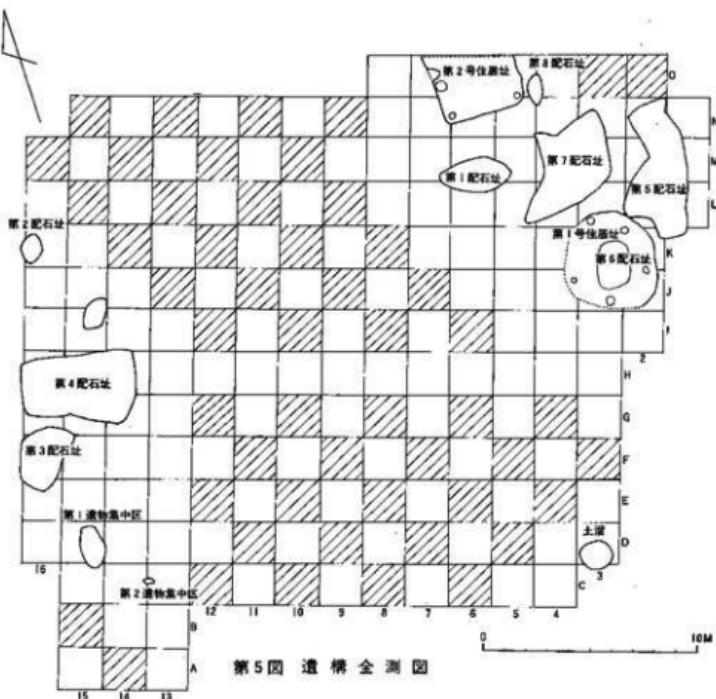
#### ロ. 発掘調査の経過

昭和55年度中における基盤整備事業地区内において、澄心寺下遺跡が含まれることが決定的となった。これに伴い調査地区の決定を行なうと同時に調査準備を進める。7月15日より発掘調査を行なう。調査区をグリッドに分ける作業から進める。南北に13列、東西に16列を設定し調査を開始する。調査は厳しい暑さの中で進められたが、大学生を中心とした若い力により順調に進められた。その結果、古墳時代の住居址、縄文時代後期の住居址、を中心とした遺構と遺物集中遺構、配石遺構等が検出された。この中において出土遺物として特徴あるものは、縄文時代早期の押型文土器片、土師器和泉期の祭祀遺物、縄文後期の土器等である。又、何ヶ所からも発見された配石遺構は祭祀の遺跡としての様相を一層強いものにした。調査はちょうど一ヶ月間続けられ、多くの出土遺物と遺構を検出することができた。細部は以下に記したような内容である。





第4図 周辺地形実測図



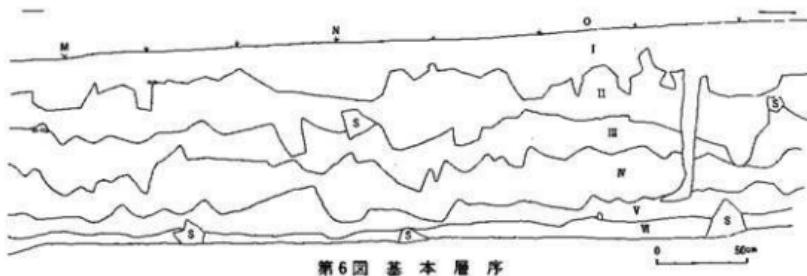
### 第III章 発掘調査の結果

#### 第1節 基本層序

発掘区東側の第3列を層位把握のためトレンチとして深耕した。南側のC-G列まではローム面までの堆積がうすく、図に示す、I、III、IV層が深められたがI層をのぞく、二つの層は水平分布に片寄りがあり、C-Dまでには存在しない。北側H-O列は、南側と対称的にローム面までの堆積が厚く、明確に五つの層に分けることができた。ここでの堆積状況は図に示すとおりである。第II層が縄文時代～古墳時代までの各時代にわたる遺物を含む包含層である。古墳時代(和泉期)の遺構のうち、集石遺構はこの第II層下面から検出された。第III層からも遺物を検出したが、数量的に少なく包含層として認めにくい。検出された遺構のうち、第I号住居址は第IV層を切り込んだ形で確認されたが、このIV層上面をもって当時の生活面とするには第III層の状態からは考えにくい。第2号住居址は、このトレンチ内で確認された層以外の茶褐色の層(発掘区北側、N-4、M-5あたりから西側に広がり、ここで第II層の下に入り込んでいる)から切入込んでいる。こ

こでは第Ⅰ層、第Ⅱ層が遺物包含層となっており、この茶褐色土層上面をもって、第2号住居址が機能していた当時の生活面としてとらえることができた。

第Ⅱ層を各期の遺物包含層として考えているが、時代、時期の前後をこのトレンチの垂直分布において把握することはできなかった。早期押型文土器片、条痕文土器片から、中期、後期、晚期さらに弥生、古墳時代に至るまでの遺物がすべてこの第Ⅱ層から検出されている。唯一早期押型文土器片が一点、第Ⅴ層から検出されているに留まる。このような状況をどうとらえるか。地形的にはこの発掘区画が西側へ傾斜していることから、上方からの流入を、遺物を伴っていない時期の遺物に関しては考えることもできようが、この条件に該当する各期の遺物には、この推測を可能にする程の風化は認められていない。以上のことから、今回の発掘区域にはかかっていないごく付近に、これらの時期の遺構の存在が推測される。



#### 層序説明

トレンチ M、N、O-3西壁セクション

第Ⅰ層〔黒色土層〕 土器片を散見する。

第Ⅱ層〔褐色土層〕 底部を含む土器片及び石器を含む。

第Ⅲ層〔黒色砂層〕 雲母粒・石英・長石を多量に含む。土器の細片を散見する。

第Ⅳ層〔灰黃白色砂層〕 二層よりも粒子の大きさの顕著な砂層。遺物含まず。

第Ⅴ層〔黒色粘質土層〕 多量の雲母粒等を含む。この層中より早期押型文土器を一点検出。

第VI層〔ローム層〕

\* 第二層に遺物が集中する。

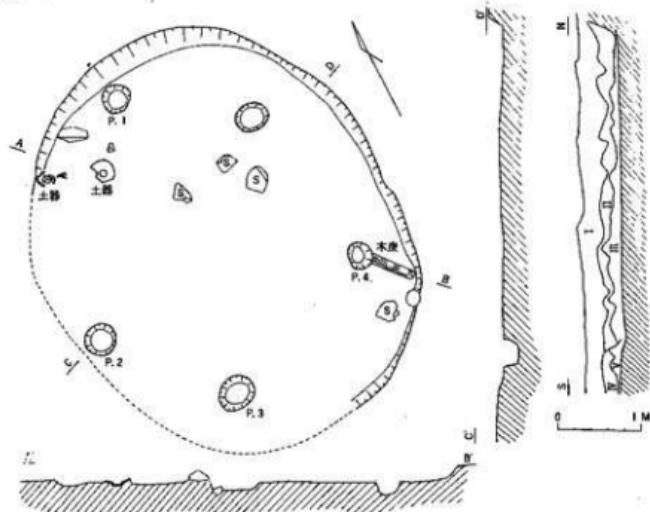
早期押型文土器～土師器までが同一層中より検出され、時代ごとの包含層が確認できます。

## 第2節 桶文時代の遺構

### 1. 住居址

#### イ) 第1号住居址(第7図)

本住居址はJ-2、J-3、K-2、K-3グリット付近に位置している。基本層序第IV層を切り込んでいる状況で確認された。調査区の東端に位置しているためグリットを拡張して実掘した。堅穴部分のプラン確認は東側は割合と見分けるに容易であったが、西・南壁は、砂土層であるため判然としない。全体的には南北にやや長い楕円形を呈している。遺物は住居址の西壁寄りに集中し、床面直上のものが多い。本住居址は覆土の排土作業が進むにつれ、焼土や、炭化物が多く検出され、住居がいずれかの時期に火を受けているものと判断した。P<sub>1</sub>の主柱穴東には、P<sub>4</sub>に入っていたと考えられる柱の炭化したものが横たわり、住居址が東に倒れてから火を受けたか、火に合って倒壊する時点で東に倒れたかのいずれかであろう。主柱穴と思われるピットが5ヶ所見つかったが、いずれも15~20cmと浅いものである。床面上には頭大の石が数個あるが、使用痕などは見られなかった。床面はほぼ全面に炭化物と焼土が散っており、東壁に近くなるほど、しっかりととした床面になっている。プランは南北5m=20cm、東西推定4m=20cm前後の楕円形を呈した住居址である。



第7図 I号住居址実測図

### 層序説明

第1号住居址 南北地層断面図	
水系レベル	771.35m
第I層	耕作土層
第II層	褐色土層

第III層	焼土・炭を含む地層
第IV層	黄色の砂層
第V層	第IV層より少し色の濃い砂層

## 2. 配石址

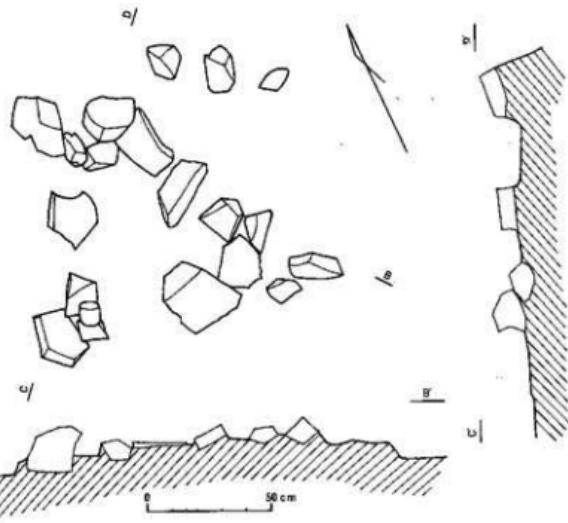
### イ) 第6配石址

(第8図)

3-J, K グリットに位置する配石址である。8ヶ所ほど見られた配石のうちでは最も配石址らしいものといえる。ほぼ頭大の角のある石十数個を1m四方くらいの中に配置している。

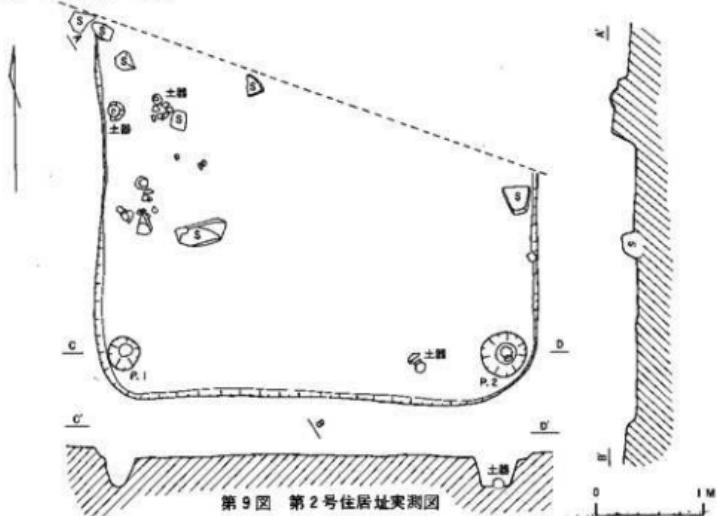
配石は特別な規則性をもってはいないが明らかに何かの意味をもって集められたものと考える。配石

調査中に土偶(第20図)が出土した。この配石址は第1号住居址のはば中央に位置しているが、この住居址が廃絶した後に土偶を伴った信仰的動作が行なわれたことを想像する。



第8図 第6配石址実測図

## 第3節 古墳時代の遺構



第9図 第2号住居址実測図

## 1. 住居址

### イ) 第2号住居址(第9図)

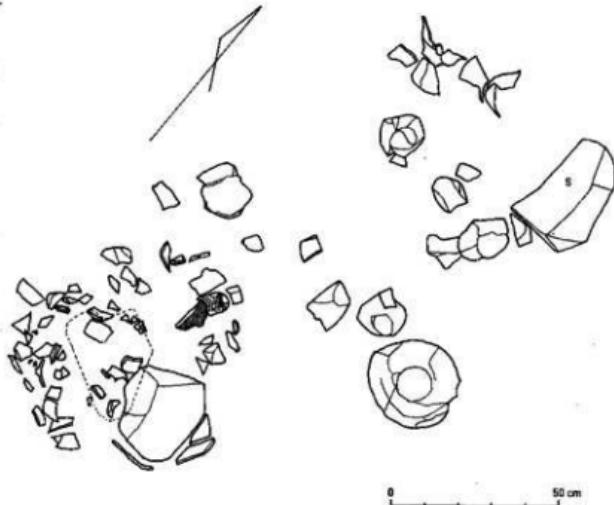
本住居址は、N-6、O-5、O-6、O-7グリット付近に位置している。基本層序Ⅱ層下付近でその存在と平面プランが確認された。住居址は図に見るよう北側が道路により切り取られており、約半分のみが確認された。竪穴の埋没土は、地形の西側への傾斜に沿って東方から流れ込んだものである。落ち込み確認面からの壁高は東、西、南壁共に10m前後と低いが、住居址が落ち込んでいる層が褐色土であるため判然とせず、主体のプラン確認までに壁外をかなり掘り取ってしまったのである。遺物は住居址の覆土を掘り下げる過程で多く出土しており、完形品を数点出土している。遺物は西壁中央寄りに集中している。又、主柱穴であるP<sub>1</sub>の底に完形の小型丸底壺が出土している。

住居址の竪穴部分は、東西4m×15cm、南北は不明だが東西とほぼ同じくらいではないかと推定する。主柱穴はP<sub>1</sub>、P<sub>2</sub>の2ヶ所で共に壁近くに位置している。深さは両方共に27cmほどではほぼ円形を呈している。床面は平らであり、良好な状況になっている。西壁寄りには中央の土器の集中している部分の中間に一ヶ所焼土が検出された。出土した遺物は高杯、小型丸底壺の類が多く、共に祭祀の遺物と見られる。そうした時、日常の生活雑器がないのはどうしたものか。この住居址は神事の時だけに使用された家なのだろうか。床面の状況からみても生活を繰りかえしていたにしては床面が柔らかすぎる感じがする。住居址が半分しか検出できなかったことがおしられる。出土した遺物からして古墳時代前期(和泉期)の祭祀に関係した住居址である。

## 2. 遺物集中区(第10図)

### イ) 第1遺物集中区

本遺構はD-15グリットを中心検出され、ブルドーザーによる表土の排土中に土師の高杯の一部が見つかって、住居址になるであろうと予想した。調査もそれを予想して進めながら、結果的には住居址にはならず、遺物をまとめて廃棄したような状況である。出土した遺物は古墳時代の土器(和泉期)のうち高杯、小型丸底壺の類が多い。これはいずれ



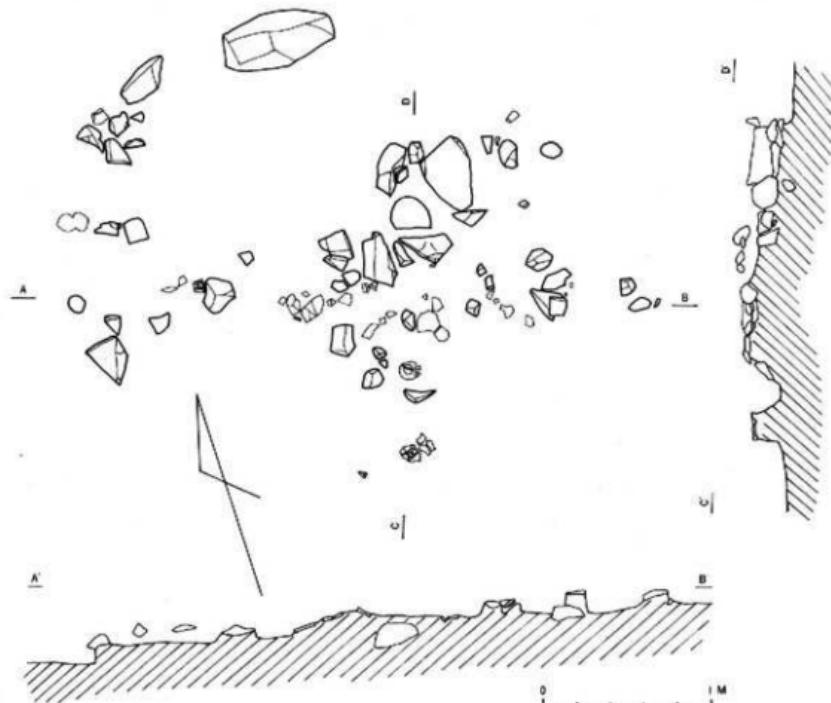
第10図 第1遺物集中区実測図

も祭祀の器と考えられるところから、神事に使用した後に廃棄したものであろうか。南寄りの角には縄文中期の小型深鉢が二つ出土している。第二遺物集中区においてもほぼ同様なことがいえる。高環と、小型丸底壺とがまとまって出土している。



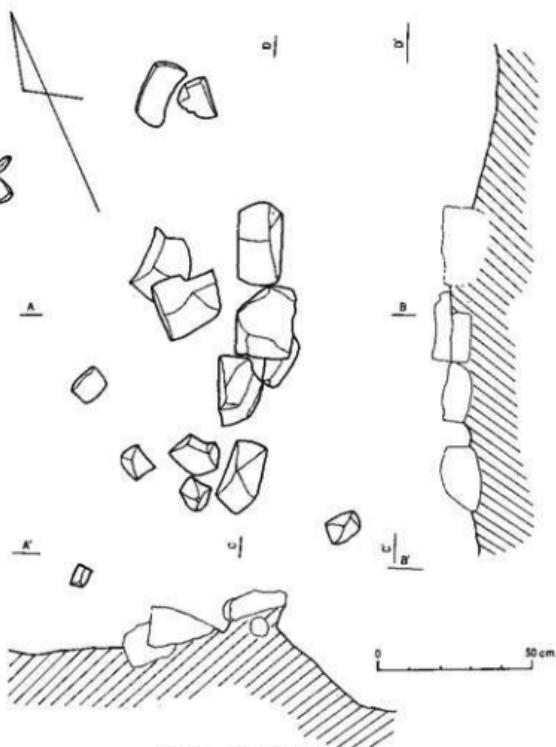
第2遺物集中区写真

### 3. 配石址

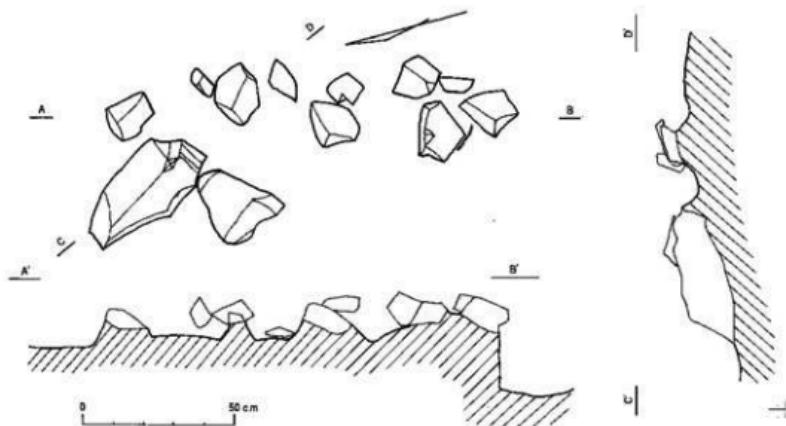


第II図 第1配石実測図

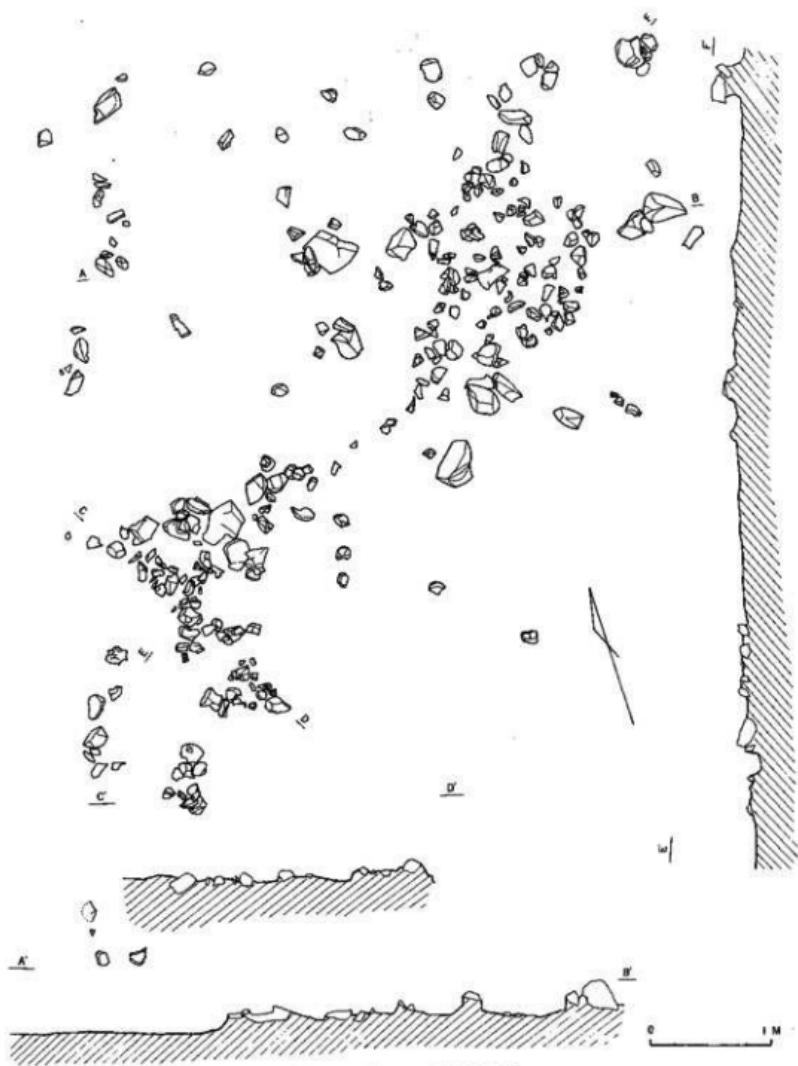
配石址として8ヶ所が検出されたが、調査の進行時に掘り上げてしまつた石も少なくはない。又配石の単位としてのまとまりも二、三を除いてその範囲を決定するのにも疑問を残した。配石の時期の位置付けにおいても決定的資料を欠いているため断定はできないが、前述した第6配石以外は古墳時代（土師器の和泉期）以後の祭祀的行事と関係をもつものと想像した。どの配石も特別な規則性をもって造られてゐる状況ではないが、第2配石と、第8配石はよく似た状況である。共に南北に長く約1m余に石を



第12図 第2配石実測図



第13図 第8配石実測図



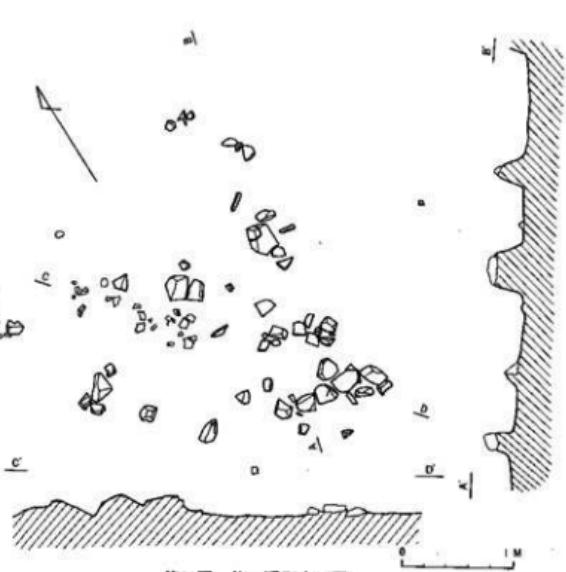
第14図 第3、4配石実測図

並べてある。石の下の土層には何の変化もなく、石だけを並べた状態である。第1配石の中には、土師器片が混入し、又、縄文後期の土器片も入っている。これ等は上部の遺跡から流入したものと考えられる。石の大きさは頭大のものから拳大のものまで様々であり、花崗岩、安山岩、砂岩類が多い。配石の性格としては前述のように祭紀的行事に関するものと想像する説だが、はたしてこれ等すべての配石址がそうであるか、配石の広さ、石の配置具合など、いずれも相違があり、



第15図 第5配石実測図

一定の形式にはなっていない。全体的には第2、6、8の配石が一応単位としてのまとまりをもっている。どの配石も石を積み上げるようにはしておらず、平面的な並べ方をしているところが多い。当時の人々がこの配石に何の意味をもって造ったかをいろいろに想像するのであるが、神事での岩座のように考えた時、どうしても少し整然とした配石をしなかったのか、ただ石を持って来て、投げてまとめたような状態にしておいたのか、この辺が配石構造が何であるか決定できない問題を含んでいる。



第16図 第7配石実測図

#### 第4節 その他の造構

##### イ) 土留(第17図)

調査区の東南3-Dグリットに検出されたものである。これについては土地の古老である福与の知野亀雄氏、上棚の毛利儀重氏がつぎのように話してくれた。以下お二人の話をまとめたものである。なお知野亀雄氏のお父さんは土溜造りの職人で一帯の土溜を数多く造られたようである。

造られた時期 明治から大正期

にかけて造られたが養蚕の盛んな時に多く造られたようである。それは蚕糞を入れることが多かったためである。

最終期は大正7、四

8年頃であった

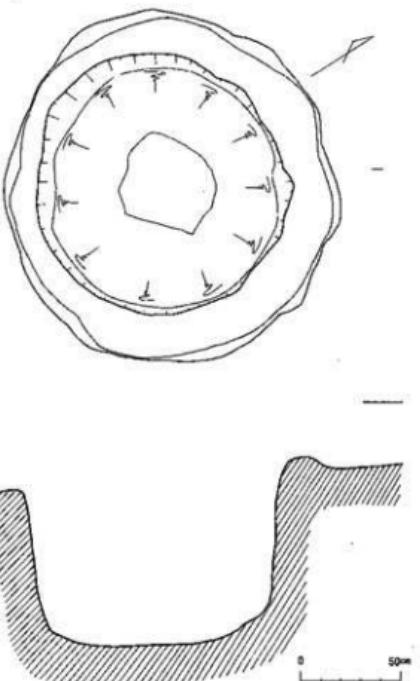
といわれている。

##### 造り方

畠の角に4尺から5尺(120cmから150cm)の円で、深さもそのくらいの穴を掘る。それから底を造り下から順次壁を造るのである。底部や壁を造る土と、壁をたたき固めることができ一番大切なところで、土は、主成分が赤土で、これに石灰・小砂・塩等を混ぜて造ったといわれている。この土に混ぜる、石灰や塩の量を加減するのに土を口の中に入れて具合を感じ取ったそうである。塩を入れるのは、冬造る時に凍るのを防ぐためである。土を少しずつ押し付けてはたたき固めた。たたく道具は自分で造ったり、木曾の方から買ったりしたという。木製で土溜の壁の内弧と同じくらいにしてよくたたきとても固くしたのである。一人で造れば3、4日はかかったそうである。

##### 使用目的

これは今日のように肥料のない時期に蚕糞などを入れて、これに水を加え、水肥として畑作物にかけるのである。最も多く入れたのが蚕糞であった。水を入れることができない場合は雨水を入れるように考えたようである。そのため水が漏らないように壁を15cmくらい厚くし、よくたたくのである。



第17図 土溜実測図

## 第5節 繩文時代の遺物

### 1. 土器 (1) 早期土器(第18図)

土器はすべて施文原体を回転させて文様を付けている。いわゆる回転押型文土器である。文様構成から分類すると、隋円押型文と、山形文の二種類である。このうち1類から4類は横位の施文帶であり、5、6類は縦位、7類は縦横の押型文が接している。8類は山形文である。

第1類(第18図1～6)隋円押型文のうち横位に原体を回転させているものをこの類とした。文様は密接する横位をしており、いわゆる樋沢式土器の特徴といわれる帯状施文ではない。この点からして細久保式に分類されるものと考える。4は口縁部でありわずかに外反するがほぼ直線で立上がりっている。

第2類(第18図7～10)第1類と同じ施文であるが、原体が不良で文様が不整形になっている。隋円が横長になっており、色調は黄褐色を呈し、胎土中に小石英を含んでいる。

第3類(第18図11)横位の隋円押型文であり、無文の帯状部を残し、そこに連続刺突をしている。胎土、焼成とともに良好である。

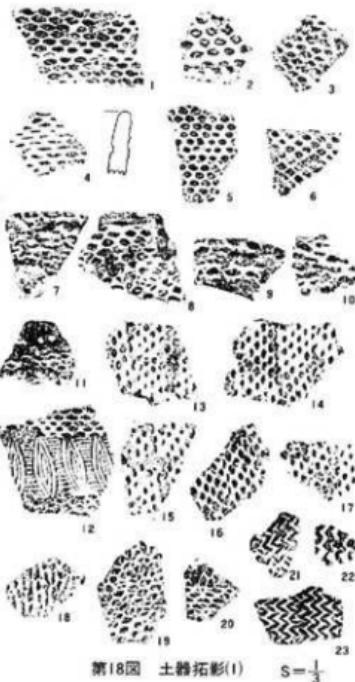
第4類(第18図12)横位の隋円押型文の間に縦沈線による連続的な紡錘形文様が施されている。この文様も全体を回転により施文したと考えるが、今後に残した問題点である。

第5類(第18図13～17)隋円押型文が縦位に施文されているもので、原体はほぼ同形を呈している。横位の文様より隋円粒が小さい。胎土中に雲母を多く含んでいる。焼成は良好である。

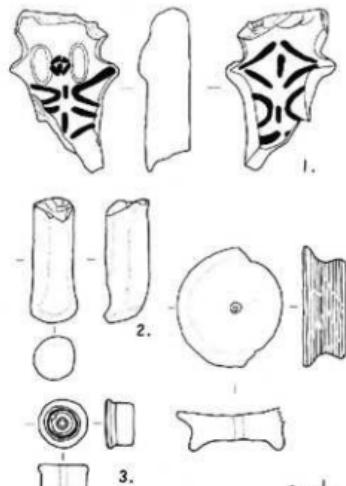
第6類(第18図18)縦位の隋円押型文のうち原体が不整形で隋円が細長いものを別にした。

第7類(第18図19、20)上部に縦位の隋円文を施し、下段に横位の施文をしているものである。接点は交錯して不整形になっている。

第8類(第18図21～23)21は施文が縦位と横位とからなり、接している。22、23は縦位の施文である。山形押形文土器はこの3点のみである。22の文様は荒いが、21、23は比較的整った山形である。黄褐色を呈し焼成は良い。



第18図 土器拓影(I)  $S = \frac{1}{3}$



第19図 土製品実測図  $S = \frac{1}{3}$

## (2) 土器拓影(第20図)

### (前期土器) 1

7-J グリット出土の土器で、赤褐色を呈し、良質の粘土を用い焼成良好である。文様は小さな半削竹管で沈線を施し、その中にこの時期の特徴的な豆粒状の小さな粘土粒を付けている。この粘土粒も二つを一組として配置している。縄文前期末の諸器C式に分類される。

### (中期土器) 2、3、4

2は12-N グリット出土の土器で、赤褐色を呈し、小砂粒と雲母を多量に含んでいる。文様は半削竹管による平行文線と、直線沈線による三角形連続文様である。

3は第8号配石からの出土で、口唇部に半削竹管を用いた連続爪形文を付け、その下に二条の並列条線を施している。良質の粘土を用い、雲母を少量含んだ焼成の良い土器である。縄文中期初頭の土器である。

4は9-O グリット出土で、深鉢の胴部であろう。文様は沈線で施され、その間を結節縄文が垂下している。黄褐色を呈し、胎土中に石英と雲母を多量に含んだ薄手の土器である。

### (後期土器) 5、6、7、10

5は第8号配石より出土した土器で、黄褐色の胎土で小砂粒を多く含み、薄手である。文様構成は曲線の区画による磨消縄文である。縄文後期前半の壇之内II式土器に属する。

6、7は第1号配石出土の土器で、胎土は黄褐色を呈し、小砂粒を多量に含み、内面は赤褐色をしている。二片共に波状口縁突起の一部である。波状の突端からボタン状突起が引下している。6の面には縄文が施され、口縁と平行して沈線が二条施文されている。縄文後期加曾利BII式に属する土器である。

10は7号配石出土で、胎土中に多量の雲母を含み焼成良好な土器である。無文で口縁と平行して一本の沈線と隆帶が走っている。隆帶は沈線を施した施文具で連続して押し凹めている。後期壇之内II式に属する。

### (晚期土器) 8、9

8は7-I グリット出土で口縁部である。胎土は良質な粘土を用い、焼成良好な土器である。口縁に並行して4本の沈線が施文されている。9も同じく口縁と並行して沈線が施文されている。胎土中には小雲母を含み、良質の粘土を用い、焼成も良好な土器である。縄文晚期の水式に属する。



第20図 土器拓影(2) S =  $\frac{1}{3}$

(3) 第1号住居址及び第1遺物集中区出土土器

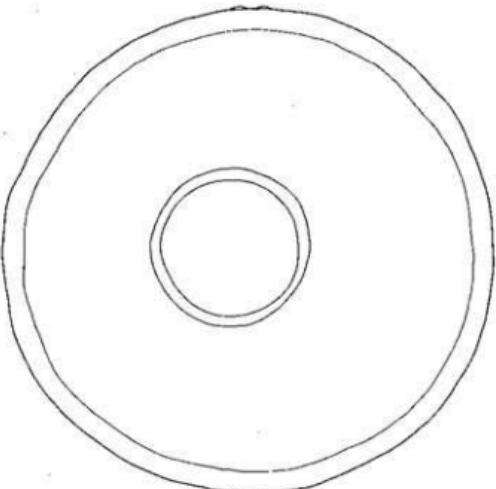
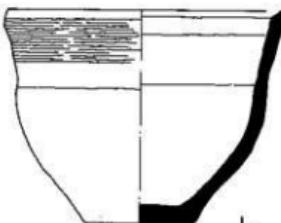
(第21図1・2)(第22図1・2)

1.は1号住居址床面上の土器である。無文粗製の深鉢形土器で、煮沸形態の土器として考えられる。胎土中に砂粒を多量に含み器面は黒色又は暗褐色を呈し、内外面共に研磨されている。器の大きさの割合には器面が厚く重量のある土器である。

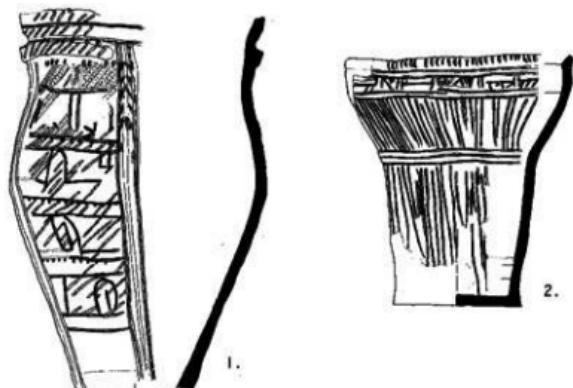
2.も同じく第1号住居址床面上の土器で、無文粗製の浅鉢形土器である。胎土は赤褐色で砂粒を多量に含み、器面は黒色で入念な研磨がされている。口縁部に対応するように小突起が二ヶ所付けられている。口唇部には巾13mmの縁取りがされ一段高くなっている。径6cmほどの小さな底部には網代が付けられている。器形のめずらしい浅鉢である。共に縄文時代後期の土器である。

第22図1.は第1遺物集中区から出土した土器で、深鉢形土器である。器面全体に縄文を施し、頸部から垂下する4本の隆帯によって四区画に分かれている。頸部には巾10mmほどの隆帯が一周し、それと並行するよう沈線が施文されている。その何段かに施文された沈線のうち55本の中に連続刺突を行なっている。口唇部は7mmほどの間隔で1コ歯状にキザミがあり、この土器の特徴的文様を現わしている。胎土は赤褐色を呈し、砂粒を多量に含み、内面も研磨されている。縄文中期初頭の土器である。

2.は第1遺物集中区からの出土で、円筒形で開口する深鉢である。底部から胴部にかけてはほぼ直線的に立ち上がり、胴部から開口している。文様の施文はほとんどが半剖竹管を施文具とし、口縁には連続爪形文を施し、その下には二条の並行沈線が一周している。頸部から胴部にかけては縦に並行する条線が施文されている。胴部は二条の並行条線が一周し、その下から底部にかけて、縦に条線が並列している。胎土は赤褐色で、焼成は良好である。縄文時代中期初頭の土器である。



第21図 縄文式土器実測図 (1)



第22図 繩文式土器実測図 (2)

(4) 土製品 (第18図1~4)

イ) 土偶

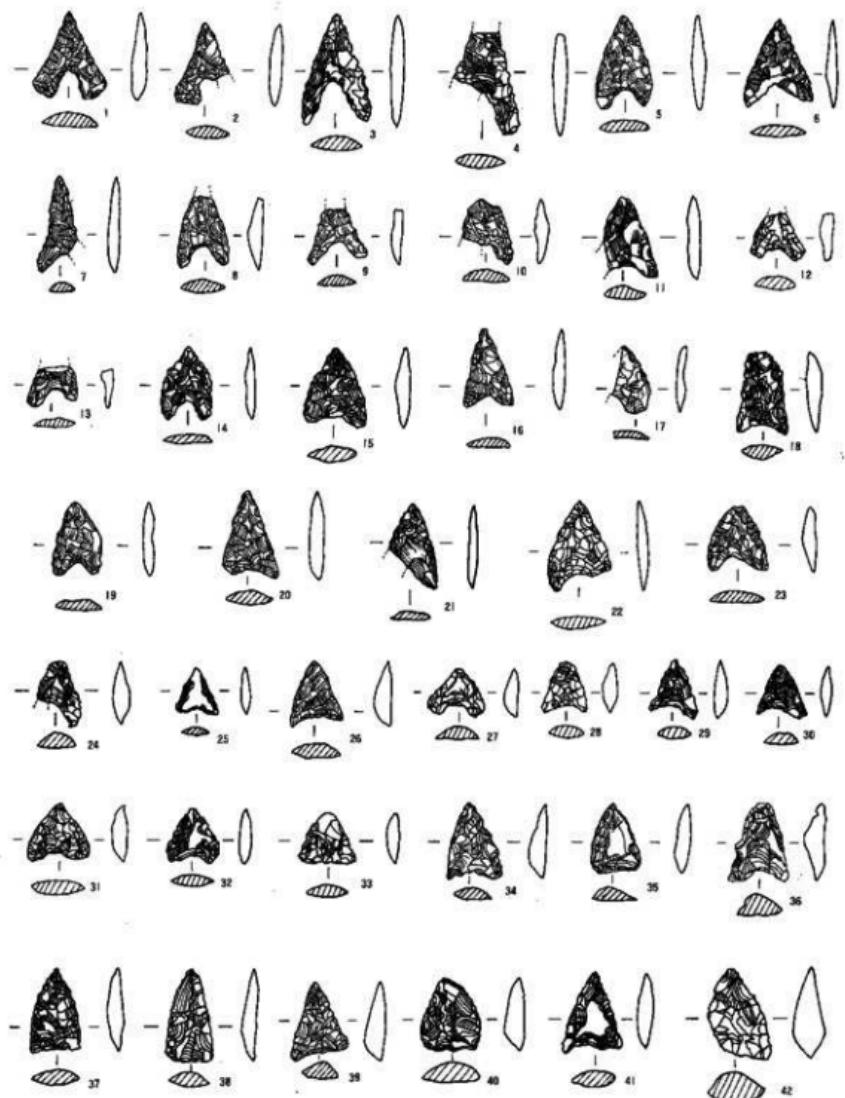
1.は第1号住居址の覆土中より出土したもので、図に見るよう頭部と胴下部を欠き、胴部のみ残ったものである。現高は8.5cmほどであるが、完形ならば15cm程度と推定される。土偶は厚さ2.5cmの板状に製作され、胸部やや上に縱長に、乳房が付けられている。胴部から腰部にかけ、沈線の文様が施されている。乳房の左右側面に1cmほどの小さな突起が付けられ、両手を表現したものと思われるが形ばかりの手の表現である。背面は腹部に付けられている文様と同じような沈線文が施されている。側面は無文である。胎土は石英と雲母を含み荒い感じである。腰下部に製作時に用いた芯にした材料の穴が見える。後期土偶の一つである。

2.は土偶の足部で3-Nグリットから出土したものである。円柱状をしており、径20mmほどで、足指の表現は無く犬の足のような形である。胎土には小砂と雲母を含み全体に黒味の強い色である。現状では左右どちらの足か推測は困難であるが、左足のように思える。後期土偶の足である。

ロ) 土製耳飾

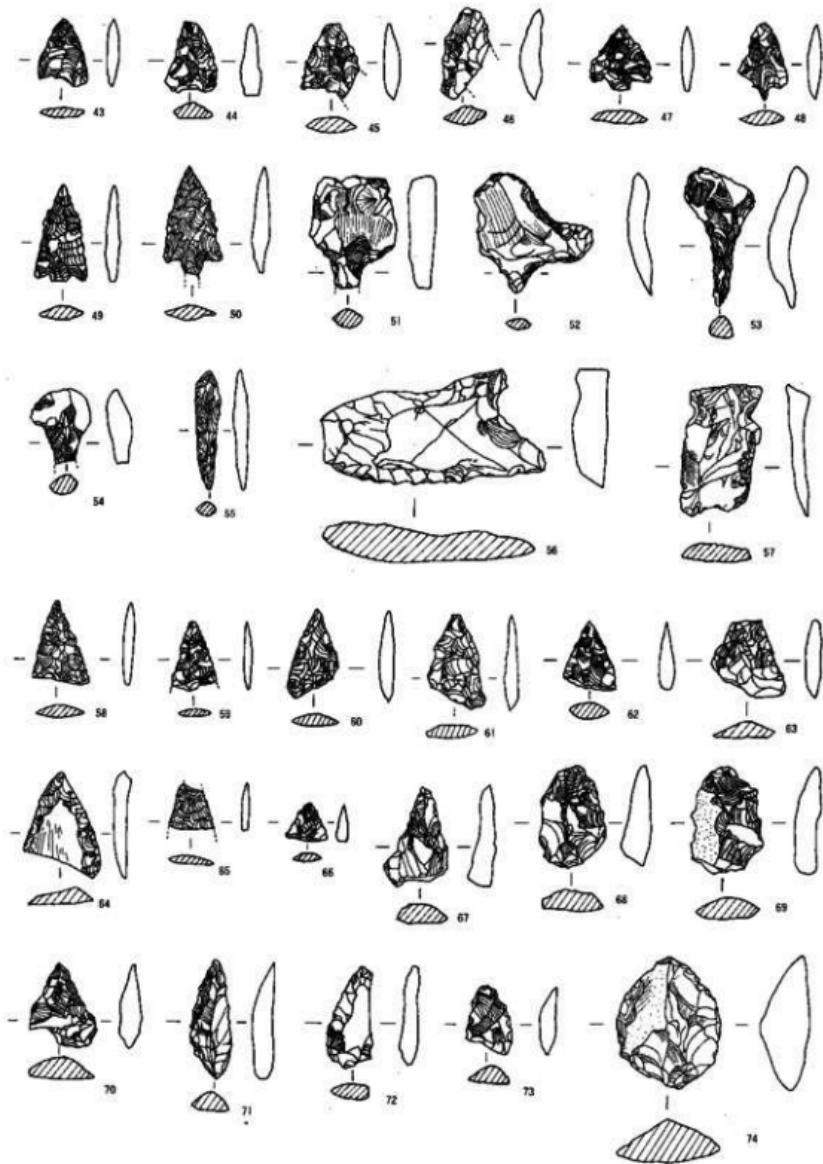
3-Mグリットから出土した完形の耳飾りである。径26cm、厚さ15mmの円形を呈している。表裏両面が凹んでいるが、一面は凹みが2mmほどであるが、裏面は凹みが6mmと深くなっている。中央に径3.5cmの孔が貫通し、良質の粘土を用いて、焼成は良好である。縄文後期の土製耳飾りである。

4.は2-Kグリットから出土したもので、径6.5cmと大きく輪形を呈している。表裏二面の径が異なり、大きな径は6.5cm、他面は5.3cmである。大径面はゆるやかな曲線で凹み、他面は6mmの凹みである。中央に径4mmの孔が貫通し、全体に黄褐色を呈し、胎土中に小砂と雲母を多く含み、焼成は良好である。3と同じく後期の土製耳飾りである。



第23図 石器実測図(1)

$S=1.5$



第24図 石器実測図(2)

$S = \frac{1}{5}$

第1表 小型定形石器（その1）

番号	図版番号	分類	器種	法量				材質	現存状態		出土位置	備考
				長さ (cm)	巾 (cm)	重量 (g)	厚さ (cm)		完形	欠損		
1	第23図	a	鉢形器	1.5	1.5	0.8	0.4	ob	○		第II	
2	"	"	"	1.4	1.1	0.5	0.3	"	○		2N	
3	"	b	長脚器	1.8	1.3	0.9	0.3	"	○		5L	
4	"	"	"	1.5	1.4	0.9	0.4	"	○		4N	
5	"	c	"	1.9	1.4	0.6	0.3	"	○		第II	
6	"	"	"	1.8	1.6	0.7	0.3	"	○		120	
7	"	"	"	2.1	0.8	0.5	0.3	"	○		2N	
8	"	"	"	1.3	1.2	0.8	0.4	"	○		9H	
9	"	"	"	0.8	1.1	0.4	0.3	"	○		6K	
10	"	"	"	1.2	1.2	0.4	0.3	"	○		7L	
11	"	"	"	1.8	1.2	0.8	0.3	"			4M	
12	"	"	"	0.9	1.3	0.5	0.3	"	○		9D	
13	"	"	"	0.6	1.2	0.3	0.3	"	○		表採	
14	"	"	"	1.4	1.3	0.5	0.2	"	○		5K	
15	"	"	"	1.8	1.6	1.1	0.4	"	○		14M	
16	"	"	"	1.8	1.2	0.5	0.3	"	○		5M	
17	"	"	"	1.6	1.0	0.3	0.2	"	○		6L	
18	"	"	"	1.9	1.3	0.7	0.4	"	○		2M	
19	"	"	"	1.6	1.2	0.6	0.3	"	○		7石	
20	"	"	"	2.0	1.4	0.9	0.4	"	○		150	
21	"	"	"	1.7	1.2	0.5	0.2	"	○		8N	
22	"	"	"	1.9	1.6	0.8	0.3	"	○		3L	
23	"	"	"	1.3	1.5	0.6	0.3	"	○		1住	
24	"	"	"	1.2	1.1	0.6	0.4	"	○		6J	
25	"	d	"	1.1	1.1	0.2	0.2	"	○		110	
26	"	"	"	1.5	1.3	0.6	0.4	"	○		1M	
27	"	"	"	1.0	1.5	0.4	0.4	ケイ岩	○		3N	
28	"	"	"	1.1	1.1	0.4	0.4	ob	○		10D	
29	"	"	"	1.2	1.2	0.4	0.3	"	○		14N	
30	"	"	"	1.1	1.2	0.3	0.3	"	○		不明	
31	"	"	"	1.3	1.6	0.6	0.4	"	○		4F	
32	"	"	"	1.2	1.3	0.5	0.3	"	○		3N	
33	"	"	"	1.3	1.1	0.6	0.3	"	○		5L	
34	"	"	"	1.8	1.4	0.8	0.4	"	○		第II	
35	"	"	"	1.7	1.2	0.7	0.4	"	○		7M	
36	"	"	"	1.7	1.2	1.5	0.5	"	○		3L	
37	"	"	"	2.1	1.3	1.1	0.4	"	○		6J	

第1表 小型定形石器（その2）

番号	図版番号	分類	器種	法量				材質	現存状態		出土位置	備考
				長さ (cm)	巾 (cm)	重量 (g)	厚さ (cm)		完形	欠損		
38	第23図	d		2.4	1.2	0.9	0.4	ob	○		7N	
39	"	n		1.8	1.4	1.0	0.5	"	○		8K	
40	"	n		1.9	1.6	1.3	0.5	"	○		3L	
41	"	n		2.0	1.6	1.1	0.4	"	○		11K	
42	"	n		2.2	1.5	2.6	0.8	ch	○		第II	
43	第24図	"		1.6	1.3	0.6	0.3	ob	○		7O	
44	"	n		1.8	1.3	1.0	0.5	"	○		7O	
45	"	n		1.8	1.4	1.0	0.4	"	○		15J	
46	"	n		2.1	1.2	1.3	0.5	"			14N	
47	"	e	有柄石鎌	1.7	1.6	0.7	0.3	"	○		15G	
48	"	n	"	2.0	1.3	0.7	0.3	"	○		不明	
49	"	n	"	2.5	1.3	1.1	0.3	"	○		13J	
50	"	n	"	2.8	1.5	1.2	0.4	"	○		2N	
51	"	f	ドリル	2.9	2.2	4.4	0.7	"	○		3N	
52	"	n	"	3.1	3.0	3.8	0.4	"	○		7K	
53	"	n	"	3.5	0.6	2.1	0.5	"	○		4J	
54	"	n	"	1.9	1.5	1.5	0.6	"	○		15F	
55	"	n	"	3.1	0.6	0.7	0.4	"			16K	
56	"	g	石匙	2.7	5.7	16.2	0.9	ケイ岩			2J	
57	"	n	"	3.2	1.8	3.9	0.4	ch	○		4L	
58	"	h	石鎌	2.0	1.4	0.6	0.2	ob	○		7M	
59	"	"	"	1.8	1.2	0.3	0.2	"	○		6N	
60	"	"	"	2.1	1.2	0.8	0.4	"	○		14N	
61	"	"	"	2.2	1.4	0.9	0.3	"	○		3N	
62	"	"	"	1.8	1.4	0.8	0.4	"	○		5L	
63	"	"	"	2.0	1.6	1.2	0.4	"	○		11N	
64	"	"	"	2.3	2.0	1.5	0.3	"	○		1N	
65	"	"	"	1.1	1.1	0.3	0.2	"	○		7石	
66	"	"	"	1.0	1.1	0.2	0.3	"	○		6J	
67	"	3類	"	2.4	1.7	2.1	0.5	"			13M	
68	"	"	"	2.5	1.6	3.0	0.6	"			7N	
69	"	"	"	2.8	1.7	3.3	0.5	"	○		3N	
70	"	"	"	2.1	1.7	1.5	0.5	"	○		4O	
71	"	"	"	3.1	1.0	1.8	0.5				第II	
72	"	"	"	2.5	1.2	1.5	0.5	ケイ岩	○		5K	
73	"	"	"	1.6	1.1	0.8	0.4	ob	○		第II	
74	"	"	"	3.3	2.7	7.6	1.3	"			7O	

## 2. 石 器

本調査において石器の出土総数は274点である。このうち黒輝石を原料とした定形石器（石鎌、ドリル、石匙等）が74点、不定形石器が107点で両方で181点となる。黒輝石を原材料としたものが全石器の70パーセントを占めている。

### (1) 小型定形石器（石鎌、ドリル、石匙）

a類（1、2） 鋸形鎌をこの類とした。2点でいずれも黒耀石製で、丁寧な剥離が施されている。大きさもほぼ同じくらいである。1点は、完形品である。

b類（3、4） 脚が長く、えぐりがかなり深いものをこの類とする。2点とも黒耀石製で、1点は、完形品である。両面共に細かい調整が行なわれている。脚の長さが約1.4cmと長く全長の約半分を占める。2点ともほぼ同じ大きさである。

c類（5～24） 脚がb類よりも短く、比較的えぐりの深いものをこの類とした。総数20点ですべて黒耀石製である。50%が欠損品で、脚部と頭部の欠損が半々である。

d類（25～46） 無柄で、三角形の底辺にあたる部分が直線か又は、えぐり込みの少ないものをこの一群とした。総数22点のうち20点が黒耀石製の石鎌である。このうち図25～33は、比較的小さな正三角形に近い石鎌で重さも平均0.4g位と小型な鎌である。これらは、すべて完形品である。残りはどうちらかといえば、二等辺三角形である。

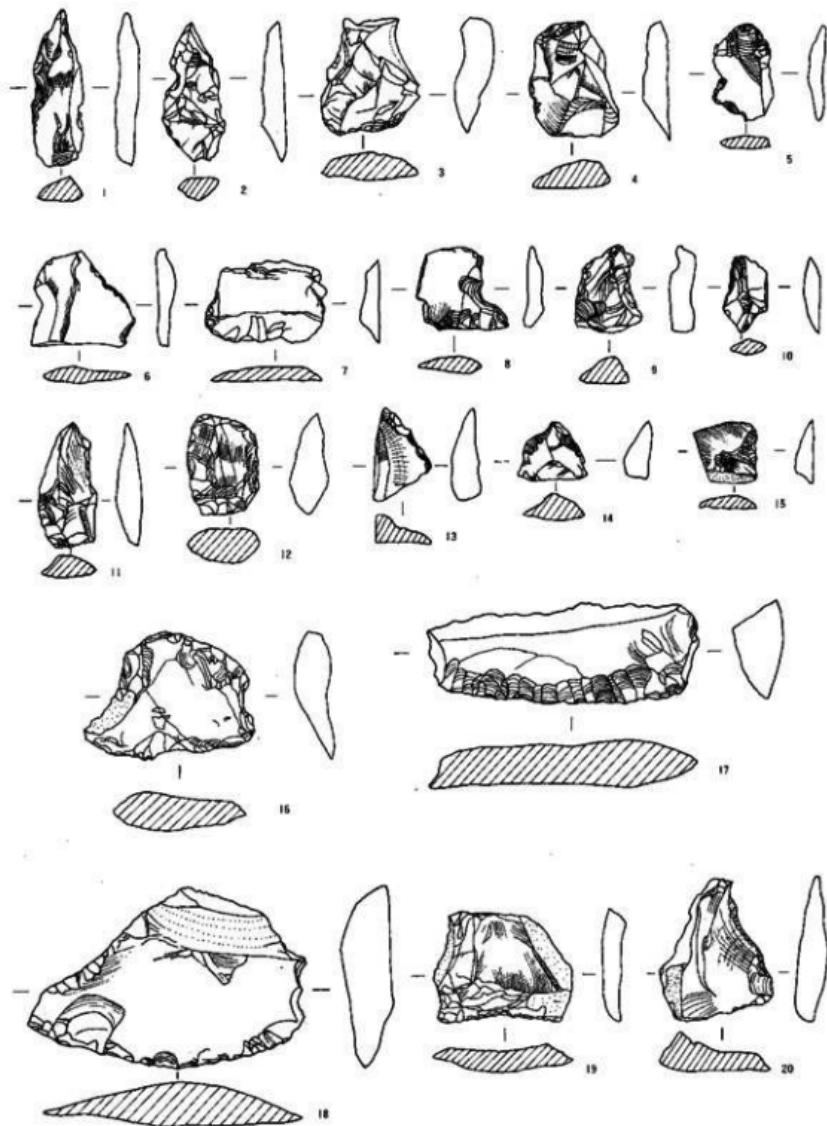
e類（47～50） 有柄の石鎌をこの類とした。総数4点で、全長の長いものと短いものの2種類ある。いずれも脚の部分が欠損している。

f類（51～55） いずれも黒耀石製のドリルである。51～54は、約2cm程の扁平なつまみを作り出している。刃の部分は、細かい調整が行なわれる。

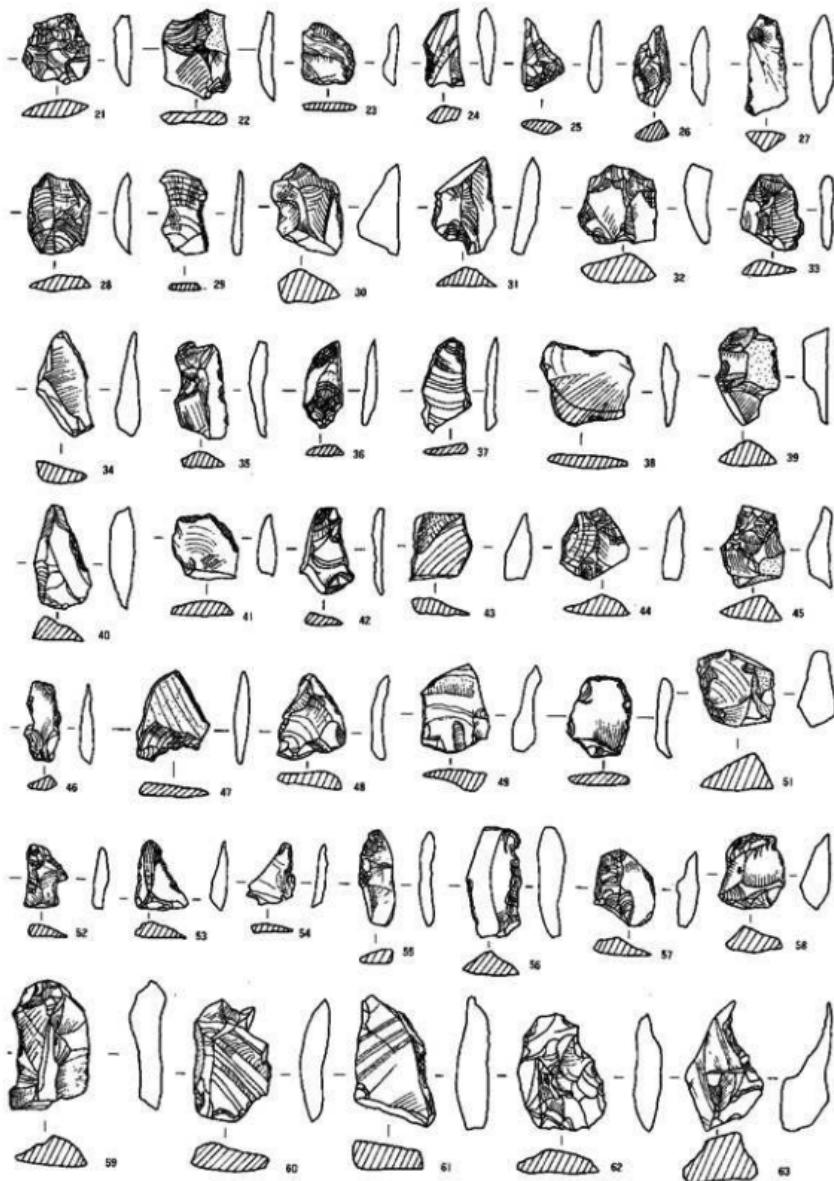
g類（56、57） 56は、ケイ岩製の石匙ではほぼ完形と思われる。片面加工の片刃で側辺と背面のなす角度がほぼ直角に近く分厚く仕上げられている。57は、チャート製の石匙で刃が両側から薄く仕上げられている。前者は、横型石匙、後者は、縦型の石匙である。

h類（58～66） 先端部や脚部の破損が著しく、形態分類が難しいものを集めこの類とした。

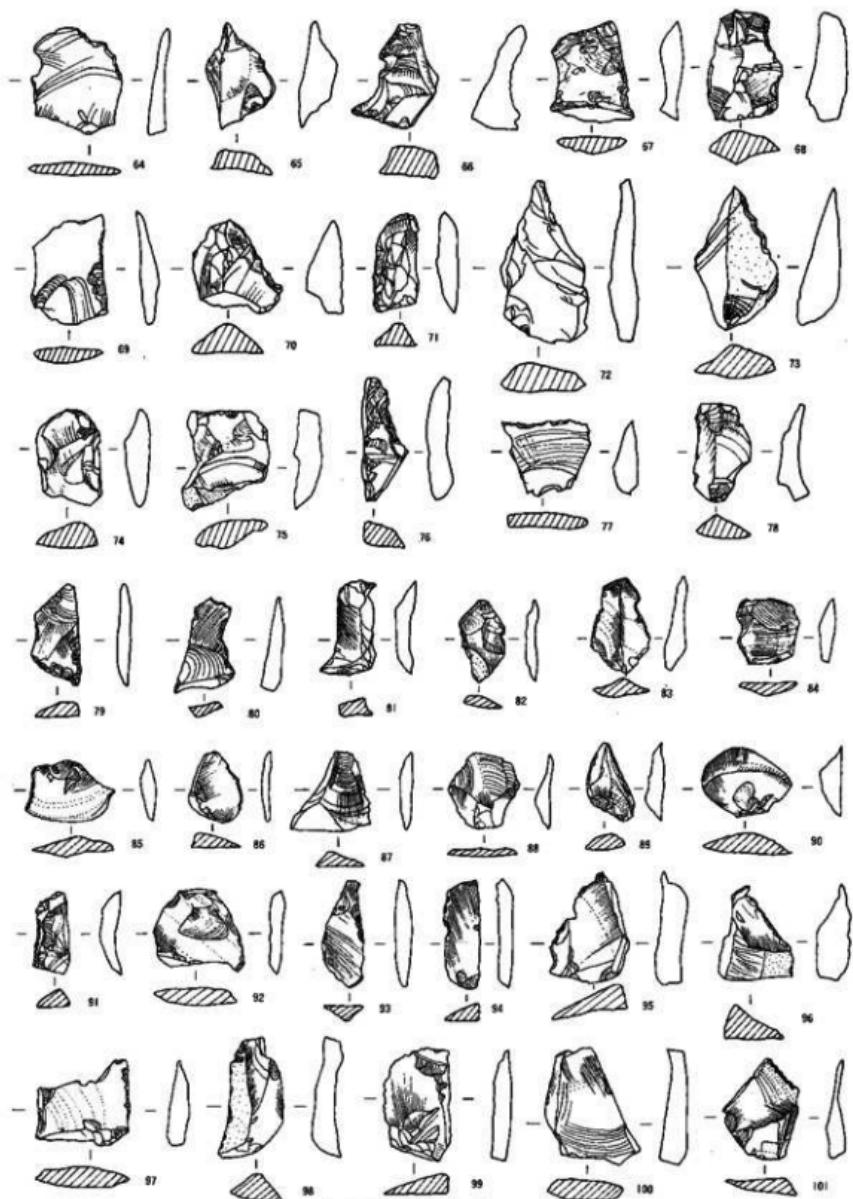
i類（67～74） a～h類の製作途中の未成品と思われる。大きさもさまざまである。片面加工のものが多く、主として周囲を調整しただけの鎌で剥離は荒く、石鎌の形状も一定していないが、比較的先端が鋭くなっているものが多い。



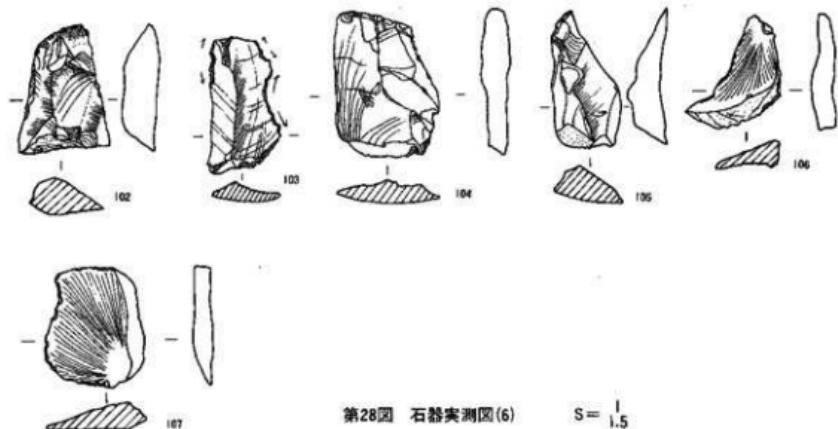
第25図 石器実測図(3) S = 1/5



第26図 石器実測図(4) S = 1.5



第27図 石器実測図(5) S = 1.5



第28図 石器実測図(6) S = 1.5

## (2) 小型不定形石器 (スクレイパー)

### a類 (第24図1~18)

石器の画面より加工して、必要な刃部を整形しているものをこの類とした。4, 6, 7, 16, 17, 18はスクレイパーとして用いられたと思われ、なかでも16は3面に刃部を施し、それぞれの使用部位によって使い分けられたものと考える。2, 8はノッシを施し円形に仕上げる搔器として使用したであろう。半径4mmの円弧になっているので直径8mmの円柱に仕上げるのにこれを使用した。

### b類 (第24図19~20、第25図21~63、第26図64~78)

石器の片面のみを加工して、必要な刃部を整形しているもので、最大長さ2~3cm、最大巾1.5~2cmの長方形類似の形をしたものが大部分である。これ等の石器はほとんどが黒曜石の細片に刃を付けて、各種の道具として用いられたものと考える。使用目的により刃部の整形をそれに合うように行なうことは大変な技術を必要としたであろう。ほとんどが搔器としての使用であったと思われるが、なかには彫刻器、ドリルに近い形のものもある。以前においてはこれ等の石器は注意されなかったが、彼等の生活には欠くことのできない大切な道具であった。

### c類 (第26図79~101、第27図102~107)

石器の周縁に使用による刃こぼれのあるものをこの類とした。この類の石器は扁平で、刃の角度が非常に鋭くなっているものが多い。黒曜石の細片の状態の時に鋭い刃状になっているものを、そのまま刃部として使用した時、刃が薄いため使用時に刃こぼれをしたものと考える。

この刃こぼれは非常に細かなものの連続で、必要あって刃を付けた状況とは区別することができる。この石器も切る搔るという機能を有しており、黒曜石の細片でも大切に道具として使っていきたいことを伺うことができる。

第2表 小型不定形石器（その1）

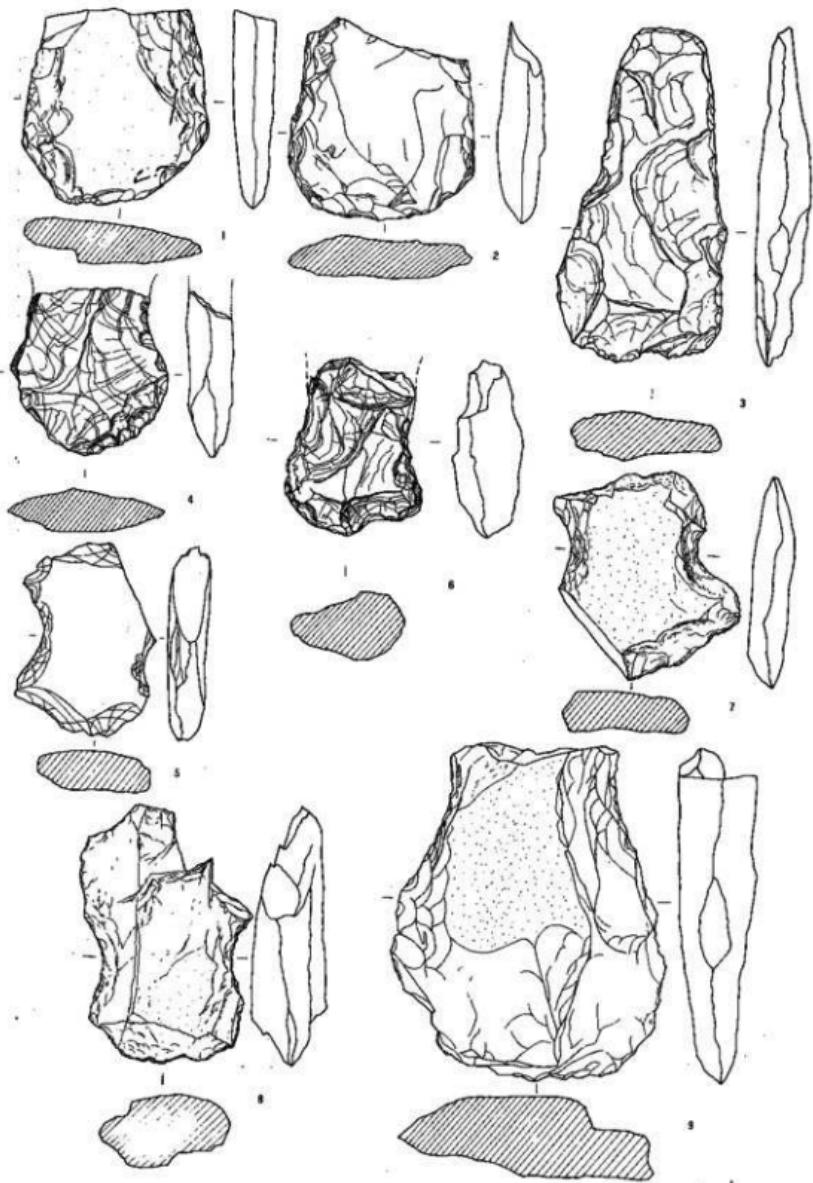
番号	図版番号	分類	器種	法量			材質	現存状態	出土位置	備考
				最大長さ (cm)	最大巾 (cm)	重量 (g)				
1	第25図	H <sub>第1a</sub>	スクレイバー	4.1	1.2	3.7	ob		1 J	石器両面加工
2	"	"	"	3.6	1.6	3.9	ch		6 N	"
3	"	"	"	2.8	2.6	6.5	赤石		3 N	"
4	"	"	"	3.0	2.1	4.9	ob		8 M	"
5	"	"	"	2.5	1.3	1.4	ob		第I	"
6	"	"	"	2.4	2.2	3.4	ch		不明	"
7	"	"	"	2.0	3.0	3.7	ch		第II	"
8	"	"	"	2.1	1.7	2.1	ob		1 住	"
9	"	"	"	2.2	1.8	2.7	ob		7 M	"
10	"	"	"	2.0	1.1	0.8	ob		1 N	"
11	"	"	"	3.2	1.5	2.6	ob		11 N	"
12	"	"	"	2.6	1.8	5.4	ob		4 M	"
13	"	"	"	2.4	1.5	1.7	ob		9 H	"
14	"	"	"	1.5	1.6	1.5	ob		第II	"
15	"	"	"	1.6	1.5	1.2	ob		10 N	"
16	"	"	"	3.1	4.4	13.7	ch		5 N	"
17	"	"	"	2.6	7.0	27.2	赤石		15 I	"
18	"	"	"	4.7	7.1	34.0	ケイ岩		16 G	"
19	"	H <sub>第1b</sub>	"	2.6	3.6	7.5			6 L	石器片面加工
20	"	"	"	3.5	2.8	6.0	ob		2 N	"
21	第26図	"	"	1.6	1.7	1.4	ob		1 石	"
22	"	"	"	2.3	1.7	1.5	ob		10 N	"
23	"	"	"	1.6	1.4	0.7	ob		4 L	"
24	"	"	"	2.0	0.9	0.8	ob		8 O	"
25	"	"	"	1.9	1.1	0.6	ob		第I	"
26	"	"	"	2.0	0.9	0.7	ob		5 M	"
27	"	"	"	2.6	0.9	1.3	ob		6 N	"
28	"	"	"	2.1	1.6	1.2	ob		8 H	"
29	"	"	"	2.2	0.9	0.5	ob		12 N	"
30	"	"	"	2.2	1.8	3.7	ob		16 G	"
31	"	"	"	2.5	1.6	1.4	ob		7 O	"
32	"	"	"	2.0	2.0	2.9	ob		3 N	"
33	"	"	"	1.9	1.4	0.9	ob		5 M	"
34	"	"	"	2.5	1.3	1.7	ob		不明	"
35	"	"	"	2.3	1.3	1.2	ob		2 L	"
36	"	"	"	2.0	1.0	0.6	ob		15 I	"
37	"	"	"	2.1	1.1	0.7	ob		2 N	"

第2表 小型不定形石器（その2）

番号	図版番号	分類	器種	法量			材質	現存状態 完形 欠損	出土位置	備考
				最大長さ (cm)	最大巾 (cm)	重量 (g)				
38	第26図	II 第1b	スクリューポー	2.1	2.0	1.7	ob		6 M	石器片面加工
39	"	"	"	2.5	1.6	2.0	#		3 L	"
40	"	"	"	2.7	1.3	1.7	#		第II	"
41	"	"	"	1.7	1.7	1.1	#		第I	"
42	"	"	"	2.2	1.4	0.7	#		6 L	"
43	"	"	"	1.7	1.5	1.5	#		6 N	"
44	"	"	"	1.8	1.7	1.5	#		15J	"
45	"	"	"	2.1	1.6	1.7	#		8 L	"
46	"	"	"	2.0	0.9	0.4	#		5 L	"
47	"	"	"	2.1	1.8	1.5	#		1 M	"
48	"	"	"	2.1	1.8	1.4	#		5 L	"
49	"	"	"	2.2	1.7	1.9	#		第I	"
50	"	"	"	2.1	1.6	1.1	#		第II	"
51	"	"	"	2.0	1.8	3.5	#		3 N	"
52	"	"	"	1.6	1.0	0.5	#		9 I	"
53	"	"	"	1.8	1.4	0.6	#		14N	"
54	"	"	"	1.5	1.2	0.3	#		4 N	"
55	"	"	"	2.5	0.9	0.9	#		5 K	"
56	"	"	"	2.9	1.4	2.3	#		第III	"
57	"	"	"	1.8	1.6	1.3	#		12N	"
58	"	"	"	2.0	1.5	2.1	#		16H	"
59	"	"	"	3.3	1.9	4.5	#		3 N	"
60	"	"	"	3.2	2.0	3.6	#		4 M	"
61	"	"	"	2.9	1.8	5.1	#		6 O	"
62	"	"	"	3.0	2.2	4.3	ch		不明	"
63	"	"	"	3.0	2.0	5.4	ob		7 M	"
64	第27図	"	"	2.6	2.3	2.2	#		9 L	"
65	"	"	"	2.7	1.7	2.2	#		3 L	"
66	"	"	"	2.7	1.5	4.6	#		4 L	"
67	"	"	"	2.6	1.8	2.5	#		5 O	"
68	"	"	"	2.8	1.9	4.4	#		8 H	"
69	"	"	"	2.7	1.7	2.6			第II	"
70	"	"	"	2.3	1.9	3.0	ob		2 M	"
71	"	"	"	2.4	1.1	1.7	#		14N	"
72	"	"	"	4.1	2.2	7.0	ケイ岩		7 K	"
73	"	"	"	3.7	2.2	4.9	ob		不明	"
74	"	"	"	2.3	1.6	2.0	#		15G	"

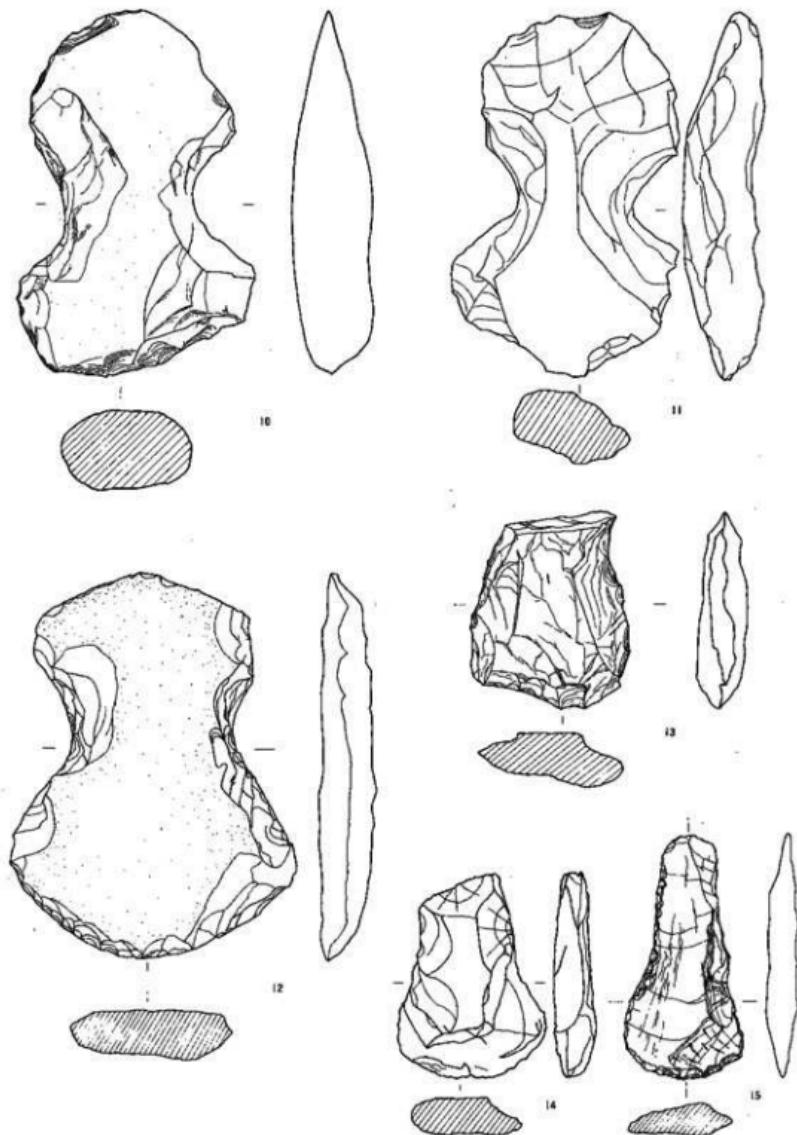
第2表 小型不定形石器（その3）

番号	図版番号	分類	器種	法量			材質	現存状態		出土位置	備考
				最大長さ (cm)	最大巾 (cm)	重量 (g)		完形	欠損		
75	第27図 1-b	スクリーパー		2.4	1.9	4.0	ob			5石	石器片面加工
76	"	"	"	3.2	1.2	2.0	#			5O	"
77	"	"	"	1.9	2.0	2.3	#			14C	"
78	"	"	"	2.6	1.4	1.5	#			14N	"
79	"	第II-c	"	2.5	1.3	1.2	#			2K	使用による歯こぼれ
80	"	"	"	2.4	1.4	1.3	#			4M	"
81	"	"	"	2.4	1.1	1.0	#			15H	"
82	"	"	"	2.1	1.1	0.5	#			5J	"
83	"	"	"	2.5	1.5	1.1	#			8O	"
84	"	"	"	1.7	1.5	1.1	#			11O	"
85	"	"	"	1.6	2.1	1.1	#			4J	"
86	"	"	"	1.8	1.4	0.6	#			12N	"
87	"	"	"	2.1	2.1	1.0	#			15I	"
88	"	"	"	2.0	1.8	0.7	#			7M	"
89	"	"	"	1.7	1.1	0.7	#			V石	"
90	"	"	"	1.8	2.3	2.0	#			4L	"
91	"	"	"	2.1	0.8	0.9	#			10L	"
92	"	"	"	1.9	2.2	2.5	#			不明	"
93	"	"	"	2.8	1.1	1.0	#			2L	"
94	"	"	"	2.8	0.9	1.3	#			12N	"
95	"	"	"	2.8	2.0	3.7	#			8M	"
96	"	"	"	2.4	1.9	2.5	#			1M	"
97	"	"	"	1.6	2.3	2.9	#			6J	"
98	"	"	"	3.0	1.4	2.7	#			1M	"
99	"	"	"	2.9	1.7	2.8	#			第II	"
100	"	"	"	2.9	2.0	4.7	#			7N	"
101	"	"	"	2.6	1.8	1.5	#			12N	"
102	第28図 2-b	"	"	3.2	2.3	6.6	#			7O	"
103	"	"	"	3.5	1.8	2.1	#			不明	"
104	"	"	"	3.7	2.7	8.0	ch			15H	"
105	"	"	"	3.6	1.7	4.5	ob			14J	"
106	"	"	"	2.7	1.8	2.6	#			第II	"
107	"	"	"	3.1	2.6	4.9	#			2M	"

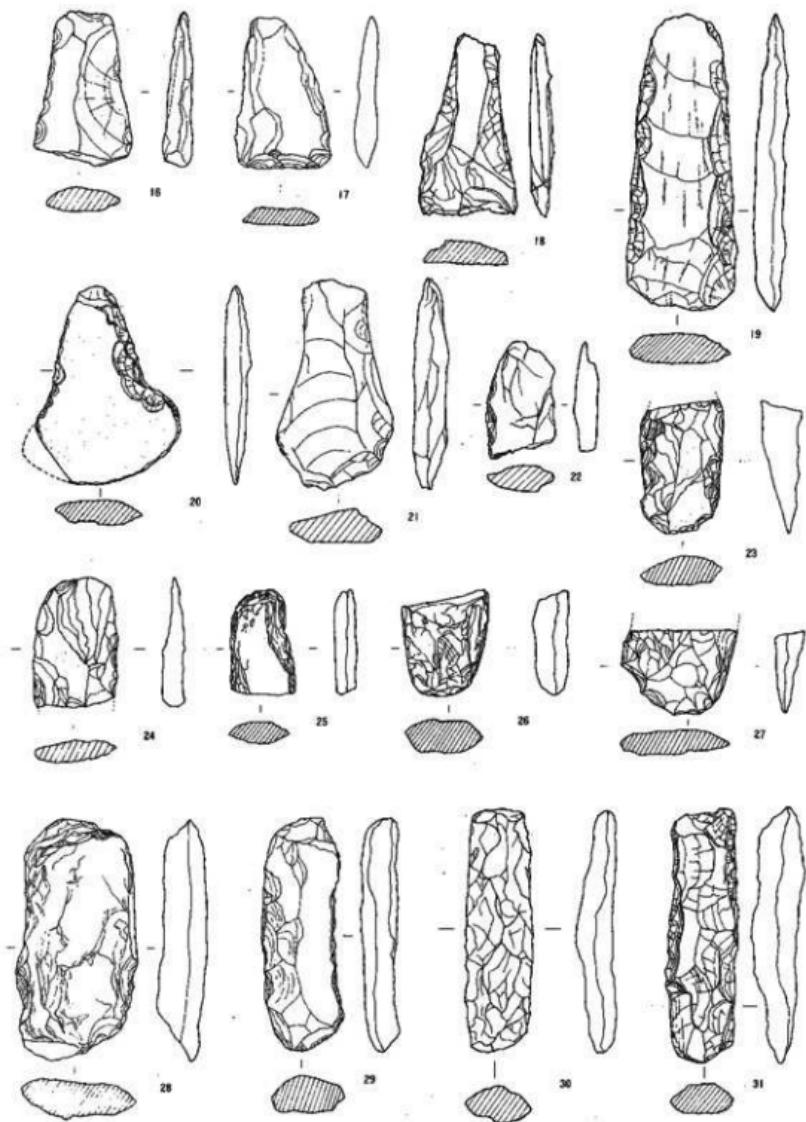


第29図 石器実測図(7)

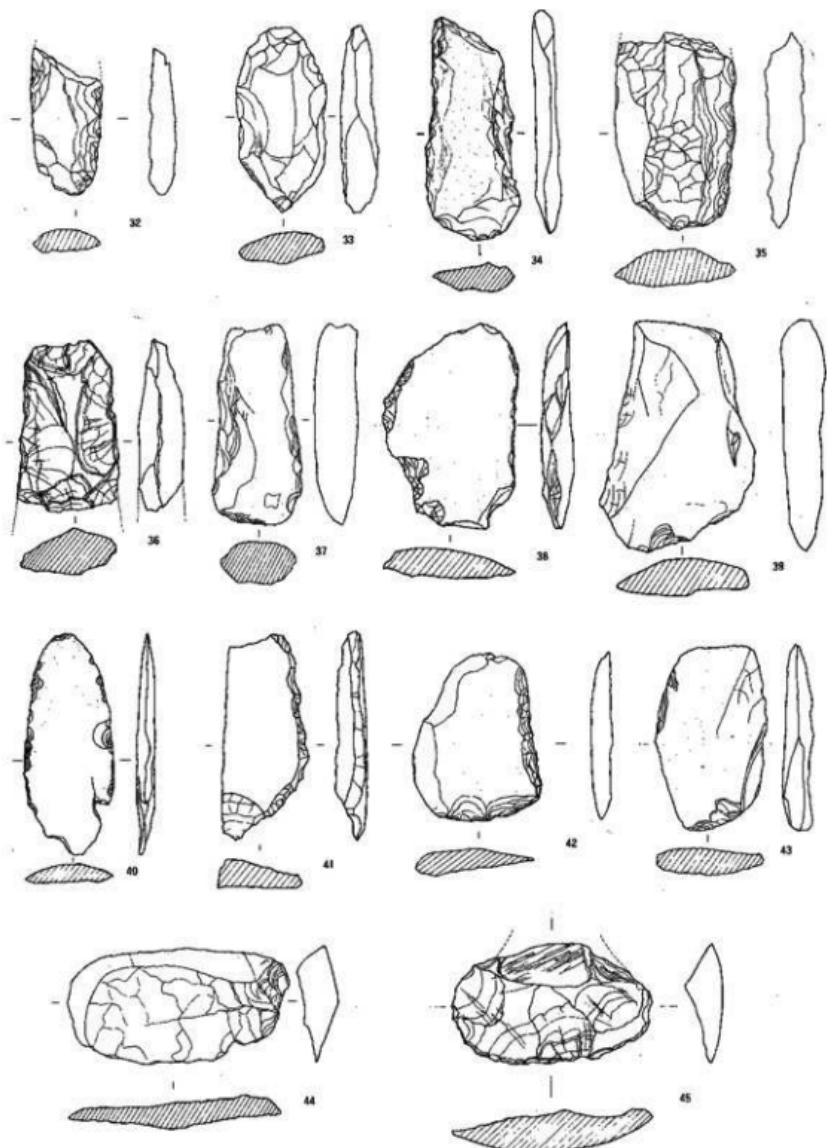
$S = \frac{1}{3}$



第30図 石器実測図(8)  $S = \frac{1}{3}$

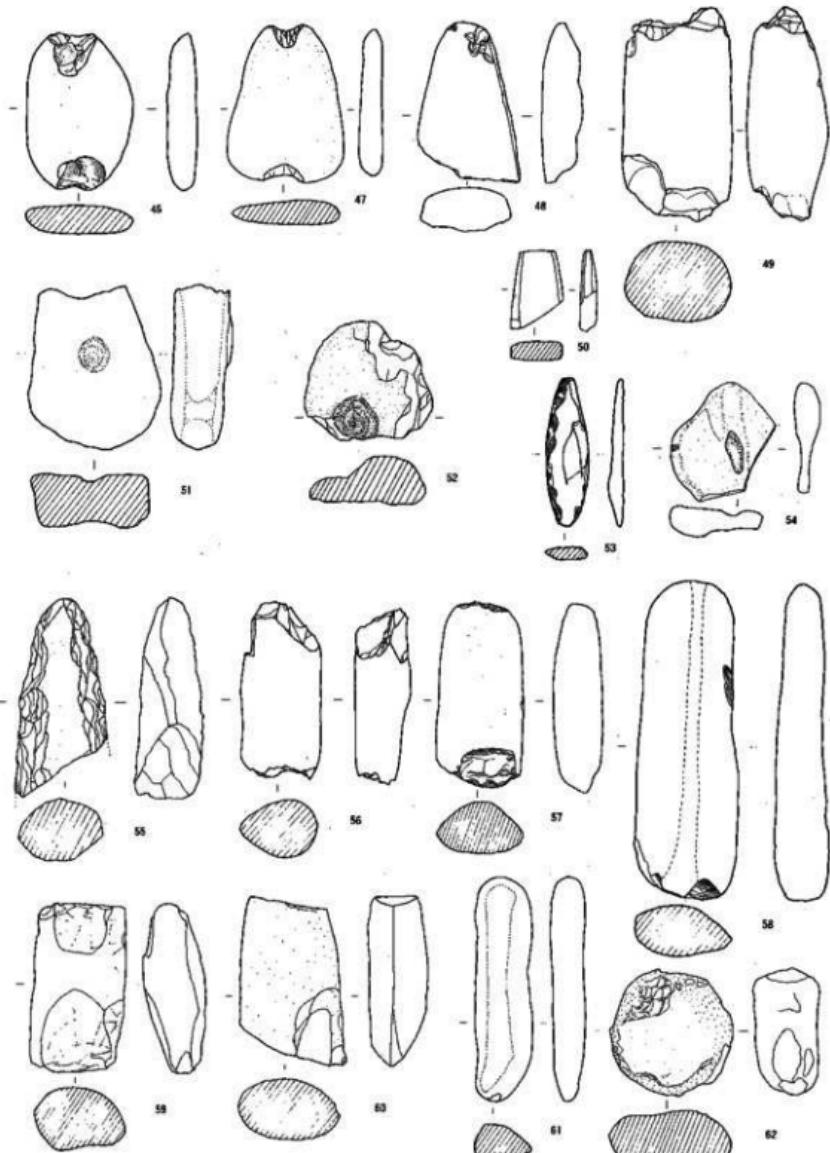


第31図 石器実測図(9)  $S = \frac{1}{3}$



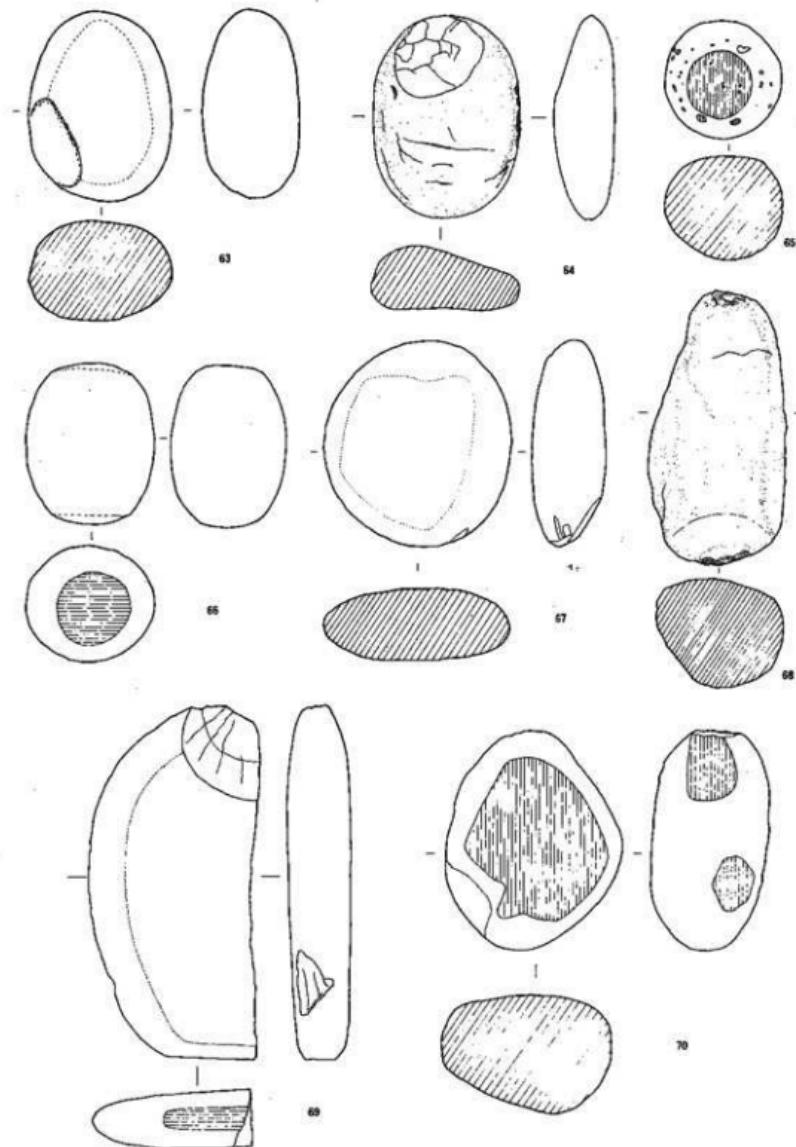
第32圖 石器実測図(1)

$S = \frac{1}{3}$

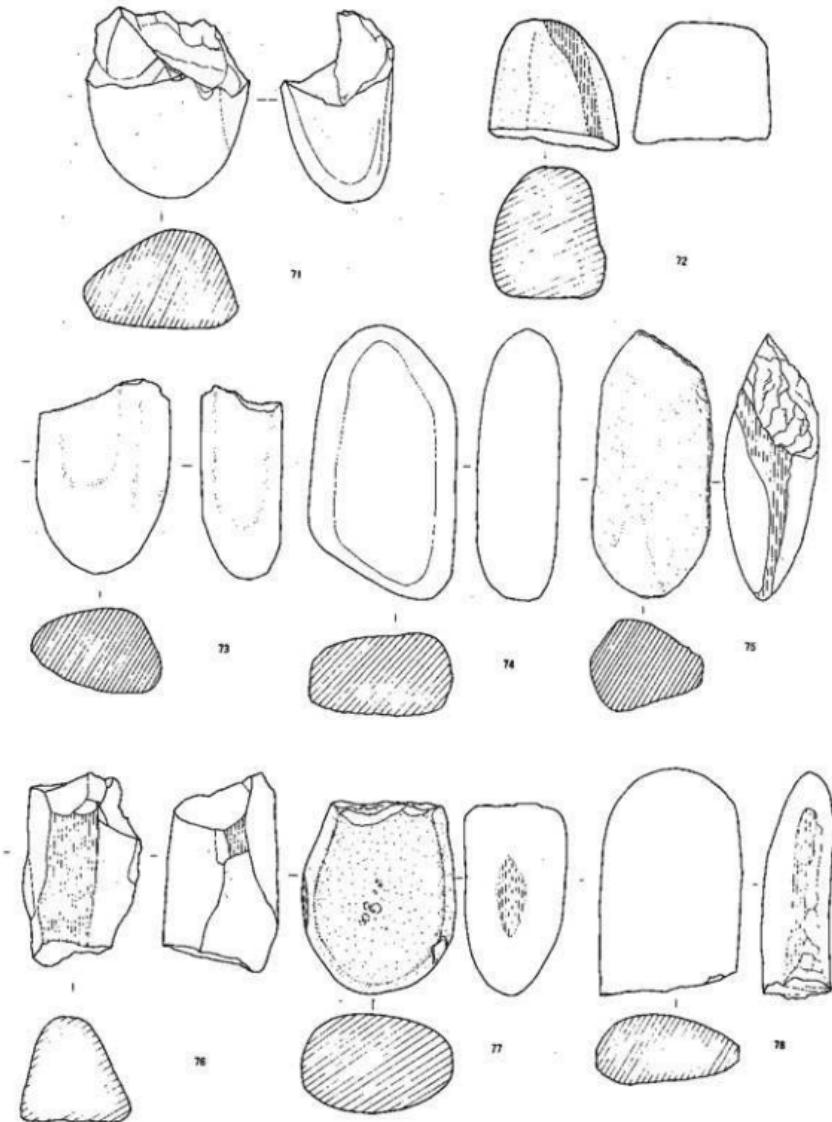


第33図 石器実測図(1)

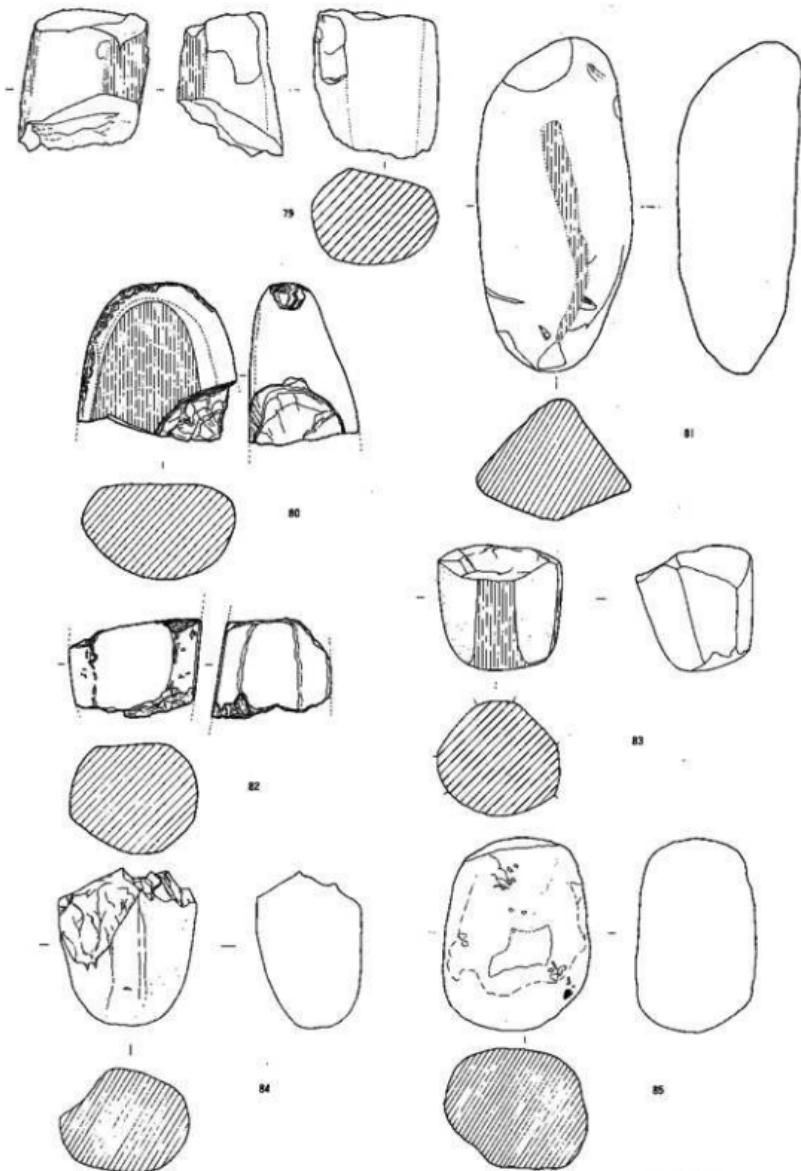
$S = \frac{1}{3}$



第34図 石器実測図(1)  $S = \frac{1}{3}$

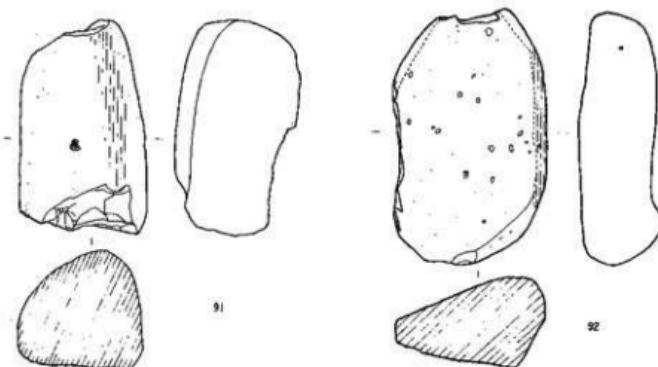
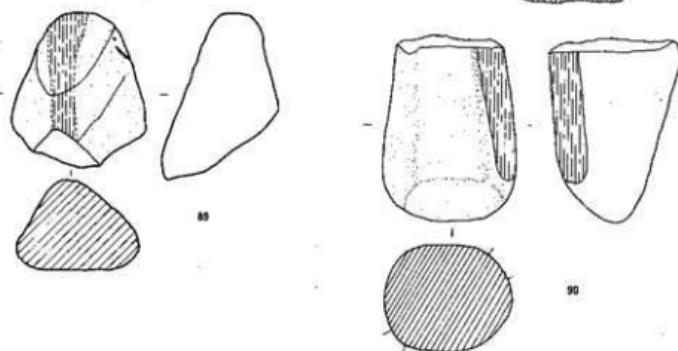
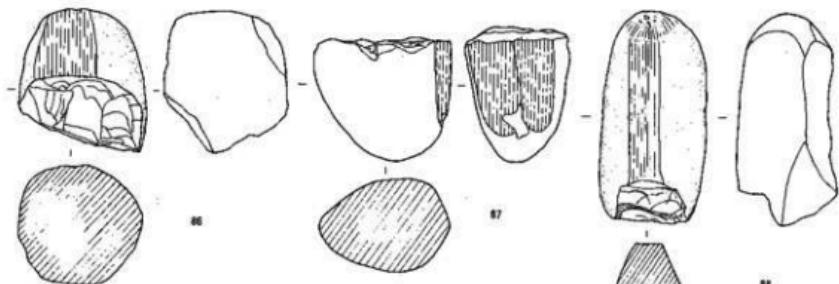


第35図 石器実測図(1)  $S = \frac{1}{3}$



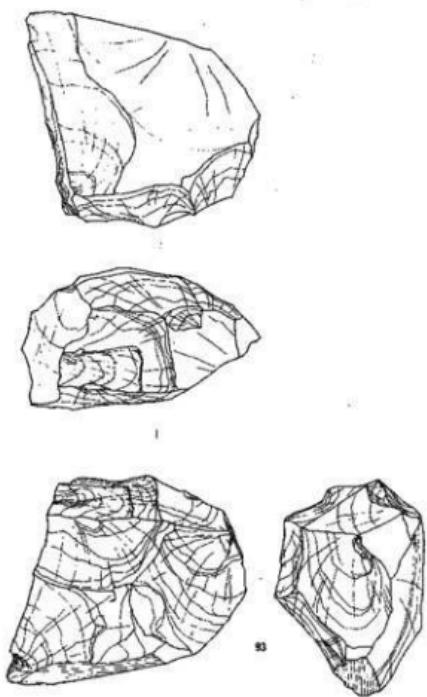
第36圖 石器測量圖(4)

$S = \frac{1}{3}$



第37図 石器実測図(1)

$S = \frac{1}{3}$



第38図 石器実測図(18)  $S = \frac{1}{3}$

### (3) 大型定形石器（打製石斧、石錐、磨製石斧、凹石、磨石、石核）

#### 第1類（第28図1～3）

撥型を呈した大型の石斧3点をこの類とした。1は片面にかなり蝶面を残している。他の2点は石の「芯」を使っている。1、2はほぼ中央から折れ刃部が残ったものであるが、共に両サイド及び刃部に多く加工痕を残している。3は完形の石斧であり、打製石斧の最も一般的な大きさ又、形を呈している。3点共に砂岩である。

#### 第2類（第28図4～9、第29図10～12）

いわゆる分鋼型石斧と呼ばれているものをこの類とした。分鋼型石斧は石斧の中でも形も大きく加工も強く行なわれているため、力感あふれる石斧である。本遺跡においては大小9個出土し非常に多いことが注目される。最大長さが10cm前後のものと、19cm前後のものの2種類に細分される。小型のものは5つ皆、破損品である。これは使用時における欠損であろうと推測する。大型の4点のうち3点は完形であり、細かな調整により形を作り出している。4点共に一面に蝶面を残し、両端の刃部は薄く調整している。12の刃部には使用による磨耗痕がみられる。9点共に砂岩である。

#### 第3類（第29図13～15、第30図16～21）

形態的には小型の石斧で、形は撥型である。この類に入るものが9点のうち6点は完形である。なかでも19は最も形が整っており、調整も全面に及び石斧らしい形をしている。母石の「芯」を利用したものが6点、蝶面を残しているものが3点である。15、19は連続的な使用を物語るように先端刃部が磨耗している。この類の石斧が最も一般的な打製石斧で数も多いが大きさ、重さにより使用目的が分かれていたと考えられる。

#### 第4類（第30図22～31、第31図32～37）

小型で短冊型をしているものが16点をこの類とした。完形のもので最大長さ10～12cmのものが多く巾は4～6cmが平均である。巾に比べて厚さがあり、棒状に近い形のものもある。

#### 第5類（第31図38～45）

刃部を側縁に付けて、横刃型石斧の要素の強いもの8点をこの類とした。全石斧が母石の剥片を利用している。すべて砂岩製で刃部は比較的細かな調整を繰返している。石器としては比較的容易に作れる種類であろう。

#### 第6類（第32図46、47）

石錐、2点出土したが、いずれも楕円形扁平な自然石を用い、上部と下部の中央を打ち欠いて製作している。100g以上の石錐は大きな方であろうか。砂岩と粘板岩を材としている。天竜川という川の幸に恵まれた地帯としては石錐のもつ意味は大きい。

#### 第7類（第32図48～50）

磨製石斧 2点出土したが共に欠損品で上部と下部をそれぞれ残している。49は一度折れたものを再度刃を調整して、打製石斧として使ったと思われる。48は全面を磨り形を整えている。

#### 第8類（第32図51、52）

凹石 2点出土している。自然石を利用したもので、50は両面に凹んだところがある。凹石は削合多い石器だが本遺跡からは二つだけと少ない。

#### 第9類（第32図53）

小型の石槍を思わせるような形をしているので打製石斧と別類としたが、何に使用されたかは、不明である。石槍として用いられたとも思えるがどうであろうか。

#### 第10類（第32図54）

石器の各部分に磨り減ったところがあり砥石に使用されたことは確実である。砂岩製の荒い面は磨り減らすのには具合がよい石である。

#### 第11類（第32図55～61）

自然石を利用した石器をこの類とした。特別石器に調整をせず自然石を利用している。58、61は下部に使用打痕を残している。折れているものが多く59は折れた後を調整して石斧として使用している。完形のもので最大長さは11～16cmほどである。この種の石器は一見目にとまりにくいかが発掘調査においては注意しなければならない石器である。

#### 第12類（第32図62、第33図63～73）

磨石 表面なめらかな自然石の一部に磨った痕を残す石器で磨石という呼ばれ方をしている一群である。なかでも65、66は一定の使い方を非常に多く続けたため磨り減って形が変るほどになっている。これほど整った形もめずらしい。他の石器も一部を磨ったり、敲いたりした痕が残り、かんたんな自然石でもみな道具として使用していたことがわかる。砂岩がほとんどである。

#### 第13類（第34図74～78、第35図79～85、第36図86～92）

特殊磨石 第12類とあまりはっきりとした区別はないが、この類の石器は石の側縁を磨り減らしているのが特徴である。非常に多数の石器で、縄文早期の押型文土器と伴なって出土することが多いので、この時期に多く使用されたのであろうか、この石器も前類同様、敲いた痕と想像される部分がいくつかあるが、それも軽く敲いたと思われる。これ等自然石を利用した石器が非常に多いのが目を引く。砂岩及び安山岩が多い。

#### 第14類（第37図93）

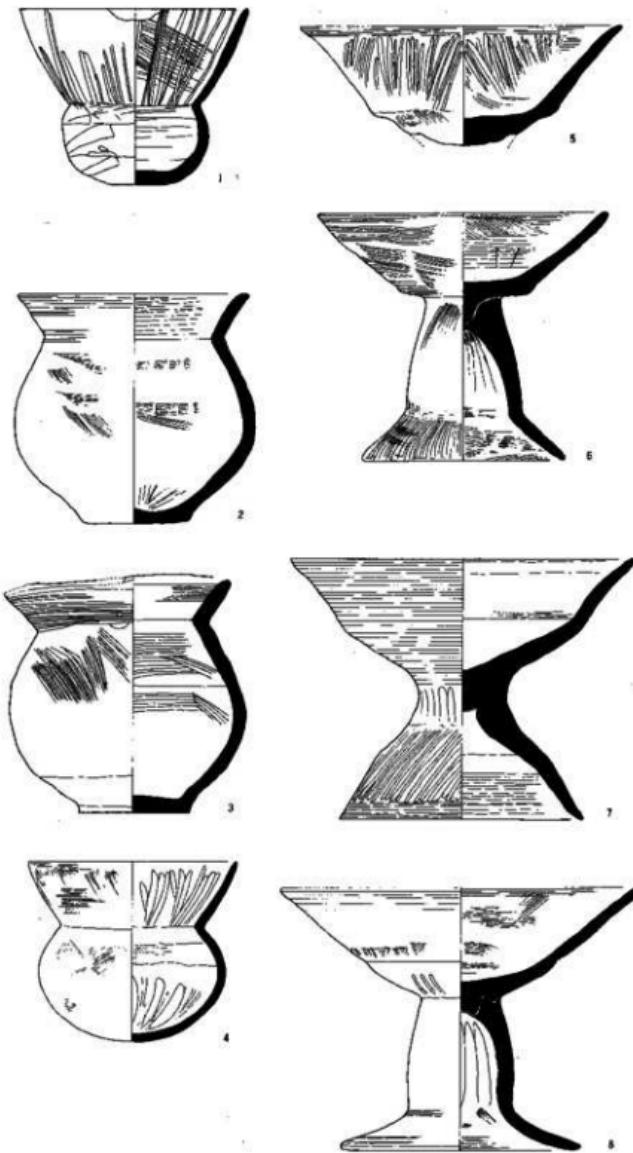
石核 打製石器の母石である。発掘調査中にこれだけの石核を検出したことはめずらしい。3ヶ所の打ち欠いた痕をはっきり残し、この石核から数多くの打製石斧が作り出されたことを物語っている。この母石ならばまだいくつかの石斧ができたであろうと思うが、途中で中止されたのか、このように大きなまま残った。

第3表 石器一覧表(その1)

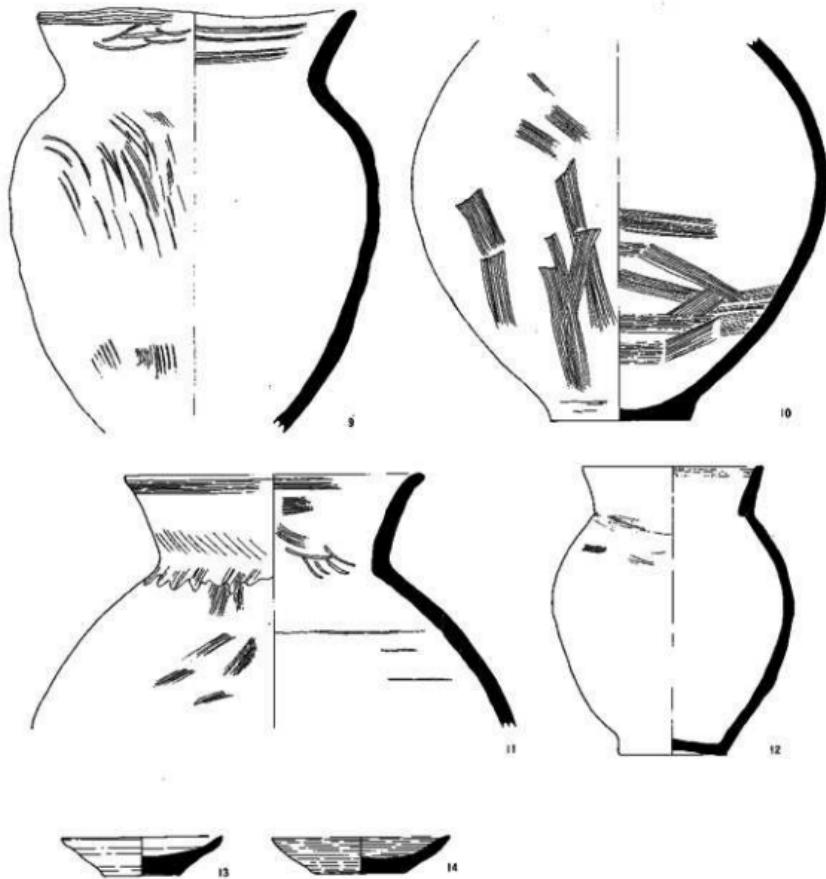
番号	図版番号	分類	器種	法 量			材質	現存状態		出土位置	備 考
				最大長さ (cm)	最大巾 (cm)	重 量 (g)		完形	欠損		
1	29図		バチ型石斧	10.2	9.5	310	砂 岩	○		3J	
2	"	—	#	10.2	9.5	280	砂 岩	○		7O	
3	"	—	#	17.4	8.5	435	#	○		L 3 T	
4	"	分どう型石斧	#	8.7	8.1	215	#			8N	
5	"		#	9.9	5.9	180	#			6L	
6	"		#	9.3	7.1	230	#			3O	
7	"		#	10.5	9.4	260	#			5L	
8	"		#	13.2	8.8	420	#			5石	
9	"		#	17.1	14.2	1,180	#			6石	
10	30図		#	18.9	12.1	980	#	○		6I	
11	"		#	18.8	6.1	870	#	○		1石	
12	"		#	20.2	14.9	910	#	○		2K	
13	"	小型バチ形石斧	#	10.0	8.2	260	#			K	
14	"		#	10.1	7.7	155	#			第II	
15	"		#	12.7	6.1	135	#	○		1J	
16	31図		#	7.7	3.9	75	粘板岩	○		8M	
17	"		#	7.8	4.9	60	砂 岩	○		5J	
18	"		#	9.5	4.7	65	#			7M	
19	"		#	15.1	8.2	210	#	○		3L	
20	"		#	10.3	7.5	100	#			5N	
21	"		#	10.9	4.8	135	#			3O	
22	"	小型短冊形石斧	#	5.7	3.5	40		○		第I層	
23	"		#	6.6	4.1	70		○		14F	
24	"		#	6.6	4.2	60		○		16K	
25	"		#	5.4	3.1	3.0		○		6 K.	
26	"		#	5.0	4.0	70		○		5M	
27	"		#	4.3	5.4	50				3M	
28	"		#	12.5	6.2	250		○		3M	
29	"		#	12.0	3.7	125				4O	
30	"		#	11.6	3.5	120		○		8O	
31	"		#	13.0	3.3	150		○		13M	
32	32図		#	6.4	3.5	50		○		9K	
33	"		#	9.6	4.1	100		○		11H	
34	"		#	10.8	4.1	110				9K	
35	"		#	10.2	6.2	160		○		1 J	
36	"		#	8.6	5.0	140		○		7M	
37	"		#	10.1	3.8	170		○		11O	
38	"		#	10.7	6.8	125		○		14N	
39	"	B		12.0	7.6	205		○		11O	
40	"		#	11.5	4.6	60		○		第III	
41	"		#	9.4	4.4	90		○		10H	
42	"		#	8.6	6.6	100		○		4J	
43	"			9.4	5.6	85		○		3L	
44	"		#	11.5	5.9	132		○		15G	
45	"		#	10.3	6.2	115		○		6L	
46	33図	石 錐		8.2	5.5	120		○		第II層	
47	"		#	7.5	6.1	110		○		15M	

第3表 石器一覧表（その2）

番号	国番 番号	分類	器種	法量			材質	現存状態 完形 欠損	出土位置	備考
				最大長さ (cm)	最大巾 (cm)	重量 (g)				
48	"	磨製石斧		8.1	4.7	145	チャート	○	6K	
49	"	"		10.0	5.7	450	領家変成岩	○	5L	
50	"	"		4.1	2.7			○		
51	"	凹石		8.0	6.8	260			C	
52	"	"		6.3	6.0	115			5M	
53	"	石槍		7.7	2.2	20		○	12F	
54	"	有溝砥石		5.8	4.8	40	安山岩		7O	
55	"	"		8.7	4.6	225			7K	
56	"	自然石利用石器		9.0	4.1	155			3LT	
57	"	"		9.5	4.4	170	硬砂岩		6F	
58	"	"		16.6	5.1	355		○	3K	
59	"	"		8.8	4.7	225			8M	
60	"	"		8.0	5.2	250			8M	
61	"	"		11.7	3.0	105		○	3M	
62	"	磨石		6.4	6.3	240		○	11K	
63	34回	"		9.9	7.4	575		○	3N	
64	"	"		10.5	7.7	385		○	6O	
65	"	"		6.0	2.0	290		○	8M	
66	"	"		8.4	6.6	500		○	13E	
67	"	"		10.7	9.6	460		○	第II	
68	"	"		14.3	7.1	1,150		○	3J	
69	"	"		18.4	8.4	860		○	7N	
70	"	"		11.4	9.2	905		○	6石	
71	35回	"		9.7	8.2	440		○	11H	
72	"	"		6.3	6.7	485		○	3K	
73	"	"		9.4	6.9	450		○	14F	
74	"	特殊磨石		13.6	7.5	710		○	12M	
75	"	"		13.8	5.9	550			9H	
76	"	"		9.4	5.7	420			3D	
77	"	"		9.9	8.0	620			I層	
78	"	"		11.6	7.3	435	砂岩		12M	
79	36回	"		7.1	6.3	330			14F	
80	"	"		8.0	8.0	450			15J	
81	"	"		17.4	8.0	1,015			表採	
82	"	"		4.9	6.6	305			7M	
83	"	"		6.5	6.4	340			8I	
84	"	"		8.2	7.2	390			10I	
85	"	"		10.1	7.5	765			6K	
86	37回	"		6.7	6.6	415			3K	
87	"	"		6.3	7.2	320			10M	
88	"	"		11.0	5.4	365			1M	
89	"	"		8.0	6.5	295			表採	
90	"	"		9.7	6.9	610			5L	
91	"	"		10.8	6.5	720			2I	
92	"	"		12.8	7.8	640			表採	
93	38回	石核		16.0	15.5	砂岩				
94										



第39図 土器実測図(1)



第40図 土器実測図(2)

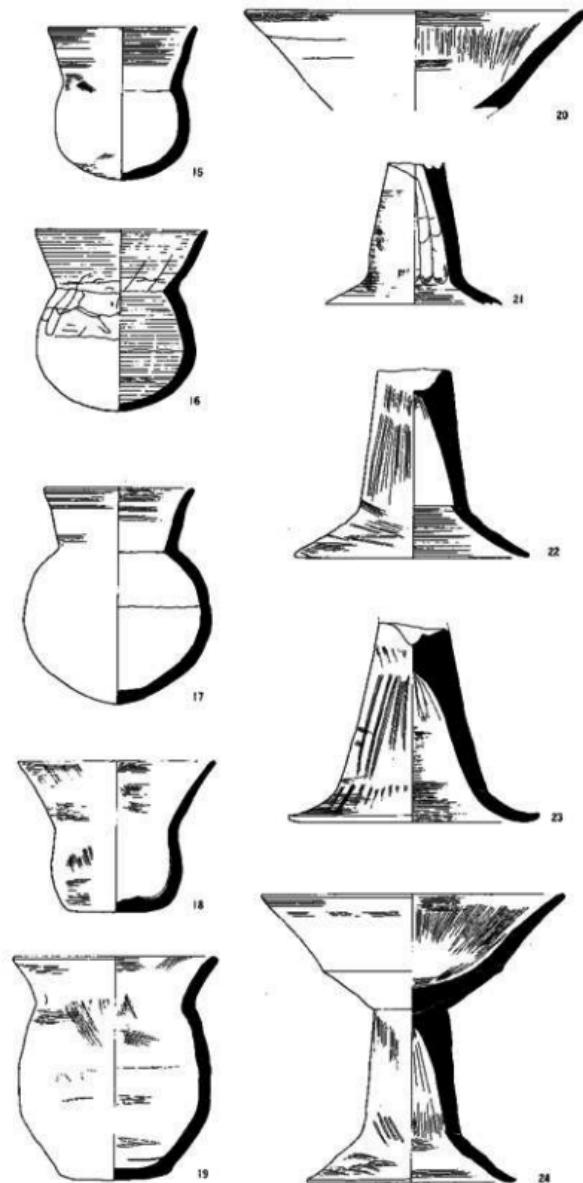
## 第6節 古墳時代の遺物

### 土器

第39図から42図に示した土器であるが、個々の様子については第4表（出土土器一覧表）に説明してあるので、ここでは概要についてのみ記す。

#### 第1類 小形丸底壺（第39図1、4、第41図15、16、18）

小型の壺形土器に分類されるものが5点出土した。このうち2点が平底で他は丸底である。6点のうち39図1は他と器形が少し異なり胴部で「く」の字状にくびれてから、口縁にかけ大きく外反している。



第41図 土器実測図(3)

内外の器面は刷毛目が残り、その上にヘラミガキが施されている。この類の中では古い器形と考える。第41図15、18は胎土中に小砂粒を多く含み、器面の調整があまりよくない。他は精製された粘土を使用し、器面の仕上げも良好で

ある。高環とセット出土する祭祀用器と考える。古墳時代の和泉期に属する土師器と思われる。

#### 第2類 高環（第39図5、6、7、8第41図20、21、22、23、24）

どの高環も各部分を製作した後に組合せ手法の製作によっている。環部は縁部と底部が接合されそのため外側に被をつくるものが多い。環部と脚部の接合は二種類あり、環底部にホゾ状の突起を付し、中空の脚上部に差込んで接合する場合、（第39図6、7、8）このためホゾ状突起が脚中に出ていている。他の場合（第41図24）のように脚上部に封じ込められているものもある。環の縁部は第39図6のみ内側しているが他はやや反りながら外反している。脚部は脚柱と裾部に分かれるが、第39図7と42図25の脚部は他と異なり、環接合部や下から外側にふくらみ、碗を伏せた形である。他は脚柱部と裾部とに分けて製作し、組合せている。脚柱部は中膨みのものが多く、接合部で大きく屈曲し、裾部が広がっている。そのため裾部の傾斜はゆるくなっている。胎土中には石英、雲母を含むものが多く、器面は刷毛、ヘラで仕上げている。

#### 第3類 小型甕（第39図2、3、第40図12、18、第41図19）

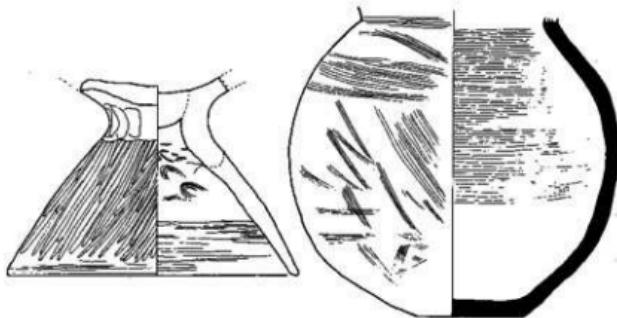
甕の形態を示すもののうち胴部最大径が15cm以下のもので小形甕とした。この部類に入るものが5点みられる。製法は輪積みで、整形は棒状工具が用いられており、その後をヘラ削りや刷毛で調整している。胴部最大径は胴中位にあり、球形に近い形をしている。頭部はくびれて、外反して口辺部をつくる。口辺部は直線がやや外に彎曲している。他の甕もほぼ同様の製法であるが、器面の整形が荒く凹凸がはげしい。

#### 第4類 大型甕（第40図9、11）

第1遺物集中区から逆位で出土したもので、肩部から上だけである。輪積製作痕を明瞭に残している。器面はヘラで調整している。

#### 第5類 环形土器（第40図13、14）

2点共にロクロによる製作で、底部に糸切り痕を残している。遺構外からの単独出土で、他の土師器より新しく国分式に属する。



第42図 土器実測図（4）

第4表 澄心寺下遺跡出土土器一覧表

図版番号	出土地	器種	法量	器形の特徴	調整(外面)	調整(内面)	色調	備考
第39図1	第I遺物集中区	小型培形土器	11.5 9.0 副部最大幅 7.3	・底部平底、肩部が小さく口辺部が大きい。 ・腹部がくびれ内窪して外へひらがっている。	・口辺部ヨコナデのあと、放射状に略文。 ・副部ヘラケズリ	・口縁部ヨコナデのち、口辺部ハケメ ・口辺部に放射状の略文。 ・副部メラナデ	淡褐色	・焼成良好 ・胎土は精成されている。口縁部内外とも黒色充形
第39図2	第I遺物集中区	小型甕	11.5 11.5 副部最大径 11.8	・底部平底で、最大幅が副部にある。	・口縁部ヨコナデ ・肩部にタテ、ヨコ方向のハケメが部分的にある。	・口縁部ヨコナデ ・副部ヘラによる調整	赤褐色	・雲母・長石を多量に含む
第39図3	第I遺物集中区	小型甕	11.0 11.8 副部最大径 11.8	・底部平底で、最大幅が副部にある。	・口縁部ヨコナデ ・副部にタテ、ヨコ方向のハケメが部分的にある。	・口縁部ヨコナデ ・副部ヘラによる調整	赤褐色	・雲母・長石を多量に含む
第39図4	第II遺物集中区	小型培形土器	10.6 9.9 副部最大径 9.1	・腹部がくびれ口辺部は直線的に外へひらがっている。 ・底部は丸底、副部に輪積の痕あり、副部と口縁部の2段階形成	・口縁部ヨコナデ ・副部ヘラケズリのあと、ヨコナデ	・口縁部ヨコナデのあとヘラナデ	赤褐色	・薄手の土器で胎土はよく精成されおり、焼成良好 ・腹部に内側からうらかいた小判形の孔1ヶ所あり
第39図5	第I遺物集中区	高 环	(16.3) (5.8) -	・ホゾは脚部に属すると思われる。 ・底形は底部と环部の2段階である。	・口縁部ヨコナデ	・口縁部ヨコナデのちヘラミガキ	淡褐色	・雲母・長石混り、脚部欠損
第39図6	第I遺物集中区	高 环	14.5 12.4 10.0	・柱状部円筒形エンタシス状を呈す。 ・施部の形状は瓶部末端までならかである。 ・环部は2段になっている。	・环部ヨコナデ ・柱状部ヘラケズリ ・施部はヨコナデのあと ・タテ方向にハケメ	・环部、口縁部ヨコナデ、ハケメによる調整 ・施部ハケメ ・柱状部紋	淡褐色	・ほぼ充形 ・雲母・長石を含む
第39図7	第I遺物集中区	高 环	17.2 13.0 12.1	・脚部が「ハの字」状に広がる円錐形の高环。 ・ホゾは环部に属する。 ・环部は中ほどで「く」の字状に立ちあがる。	・环部上半横方向へラミガキ、くびれの部分はタテ方向のヘラミガキ、脚部斜め方向ヘラミガキ	・环部ヘラミガキ ・脚部ヨコナデ	暗褐色	・焼成良好 ・环部、脚部の一部黒色、ほぼ充形
第39図8	第II遺物集中区	高 环	18.0 13.1 (12.1)	・柱状部が円筒形(エンタシス状にふくらむ)。 ・环の底部が平らになっている。 ・ホゾは环部に属する。环部は2段になっている。	・环上部ヨコナデ ・柱状部ヘラケズリ ・脚部ヨコナデ	・环部ヨコナデ ・施部ヨコナデ ・柱状部紋	赤褐色	・脚部大半欠損 ・雲母・長石を含む

(注) 法量の数字は  
口徑  
器高( )は現高  
底径

回番 番号	出土地	器種	法量	器形の特徴	調整(外面)	調整(内面)	色調	備考
第40 団 9	1 住	甕	(16.5) (22.0) 胴部最大径 19.2	・胴部上端に口 縁部がつけられ ている。	・口縁部ヨコ方 向のハケメ ・胴部タテ方向、 ナナメ方向のハ ケメ	・胴部ヨコ方 向のハケメ ・口縁部ヨコ方 向のハケメ	赤褐色 ・胴部一部黒色	・焼成良 ・胎土に雲母を 含む ・輪積み
第40 団 10	1 住	甕	— (22.0) 底径7.3 胴部最大径 21.2		・胴部下部は 圓錐状工具によ るタテ方向のハ ケメ ・胴部上半部、 部分的にハケメ、	・胴部から底部 にかけて圓錐状 工具によるヨコ 方向のハケメ	赤褐色 ・内側側 部スス付 着 ・器盤の 中が黒く 器曲が赤 褐色の部 分がある	・胎土に雲母、 長石を含む。 ・口縁部欠損 ・焼成や良 ・出土の状況逆 位。
第40 団 11	第I 遺物 集中区	広口壺	(15.0) (13.5) 胴部最大径 (25.0)		・口縁部ヨコナ デ ・頭部～口縁部 にナナメ方向の ヘラナデ ・胴部の一部に タテ、ヨコ方向 のヘラナデ	・口縁部、ヨコ ナデのちヨコ 方向にハケメ ・胴部ヘラナデ	赤褐色	・雲母・長石を 含む。 ・輪積みの粘土 ひも約1.5cm幅 ・焼成や良 ・出土の状況逆 位。 ・胴部下半～底 部欠損
第40 団 12	第三遺物 集中区	小型甕	9.5 15.3 胴部最大径 12.6	・底部平底で、 粗雑なつくりで ある。口縁部を つくり、胴部の 内側から貼り付 けてある。タテ 長のカヌである。	・口縁部ヨコの ハケメ。頭部タ テ方向のハケメ ・胴部指おさえ によるハケメ。	・口縁部ハケメ	赤褐色 ・胴部一部 にスス付 着	
第40 団 13	90 グリット	甕	8.3 2.0 底径3.9	・口縁付近でや や内溝する。			赤褐色	・焼成良 ・雲母・長石混 り ・糸切底
第40 団 14	15J	甕	9.2 1.9 底径4.6				淡褐色	・焼成良 ・雲母・長石混 り ・糸切底
第41 団 15	2号住	小型 埋彩土器	7.5 7.5 胴部最大幅 6.5	・底部丸底で、 胴部の張りはあ まりなく、頭部 から外側へ直線 にひらく。 ・頭部のくびれ が比較的なだら かである。	・口縁部ヨコナ デ ・底部ハケメ ・胴部指おさえ による整形	・口縁部ヨコナ デ ・胴部ヨコナデ	暗褐色	・口縁部から胴 部にかけて半分 ほど黒色。口縁 部の一部にスス 付着。完形
第42 団 16	2 住	小型 埋彩土器	8.7 9.3 胴部最大幅 8.4	・丸底の指であ るが安定してい る。頭部がくび れ、口辺部は内 溝して外へひろ がる。口縁部で 接合している。	・胴部ヘラケズ リ ・口縁部ヨコナ デ	・口縁部ヨコナ デ	淡褐色	・焼成良好 ・胎土精製 ・口縁の一部欠 損 ・胴部輪積み (軽土ひも約1km 単位)

団版 番号	出土地	器種	法量	器形の特徴	調整(外面)	調整(内面)	色調	備考
第41回 17	2号住	小型 埴形土器	7.5 10.8 肩部最大幅 9.3	・丸底の堆で、 不安定である。 頸部でくびれ、 口辺部はほぼ垂直に立ち上がる。	・口縁部ヨコナ デ ・胴部一部ヘラ ナデ	・口縁部ヨコナ デ	・赤褐色 胴部の一部黒色	・焼成良好 ・胎土は雲母を 多量に含む。口 辺部、胴部の内 側に黒い斑点 ・胴部輪積み
第41回 18	2号住	小型 埴形土器	9.8 7.5 肩部最大幅 6.5	・底部は平底で ある。 ・胴部は手づく ね ・頸部から直線 的にひろがる。	・口縁部ヨコナ デ	・口縁部ヨコナ デ	・暗褐色	・ほぼ完形 ・雲母・長石混 り
第41回 19	2号住	小型壺	10.5 11.0 肩部最大幅 9.6	・不安定な平底 で、頸部でくび れ、直線的に外 へひろがる。	・口縁部ハケメ ・底部周辺に指 跡あり。胴部 ハケメ ・頸部にはぱり の感あり。	・口縁部ヘラナ デ。T.共による 痕あり。	・赤褐色 ・胴部の一部黒色	・胎土に雲母・ 長石を含む。 ・胴部輪積み
第41回 20	2号住	高 坯	17.0 (5.5)		・口縁部ヨコナ デ	・口縁部ヨコナ デ ・胴部タテ方向 のヘラミガキ。	・淡褐色	・脚部欠損 ・坯部上半のみ ・坯部内面一部 黒色
第41回 21	2号住	高 坯	— (6.9) (8.8)	・柱状部円筒形 ・エンタシス状	・頸部ヨコナデ	・頸部ヨコナデ	・赤褐色	・坯部欠損
第41回 22	2号住	高 坯	— (9.4) 11.7	・柱状部円筒形 ・頸部と柱状部 に絞りあり。	・柱状部ヘラケ ズリのあとヘラ ミガキ。頸部ヨ コ方向のヘラミ ガキ	・頸部ヨコナデ		・坯部欠損 ・焼成良好
第41回 23	2号住	高 坯	— (9.8) 12.6	・柱状部円筒形 ・ホゾは坯部に 属する。	・頸部はヨコナ デ			・坯部欠損
第41回 24	2号住	高 坯	15.1 14.4 10.5	・坯部は2段に なっている。柱 状部は円筒形で ある。 ・ホゾは坯部に 属すると思われる。	・柱状部のヘラ ケズリのあと、 タテ方向のヘラ ミガキ ・頸部はナナメ 方向のヘラミガ キ ・坯部ヨコナデ	・坯部、口縁部 ヨコナデ後、タ テ方向のヘラミ ガキ ・頸部ヨコナデ ・坯底部ヘラミ ガキ	・暗褐色	・焼成良好
第42回 25	第I遺物 集中区	高 坯	— (8.6) 12.7	・脚部は「ハの 字」状に広がる 円筒形の高坯 ・ホゾは坯部に 属する ・坯部と脚部の 接合部をしづつ てある。	・ケズリの上、 タテのヘラミガ キ	・底部より3cm 位の幅でケズリ、 そのつづきをナ デ。指頭圧痕あ り。	・赤褐色	・胎土は雲母を 多量に含む。
第42回 26		壺	— (13.5) 4.6	・脚部に載大幅 を有する壺で成 形はゆがんでい る。	・胴部タテ方向 のヘラケズリの あと、ヘラミガ キ		・黒褐色 ・脚部一部 赤褐色	・昭和43年1月 18日、浅川米吉 氏発見。 ・焼成良好、胎土 は雲母・長石を 含む。 ・輪積み整形

## 第Ⅳ章 まとめ

澄心寺下遺跡は、天竜川左岸の第5段丘上に在って、その範囲は極めて広く10,000m<sup>2</sup>以上に亘るものと見られるが詳細は不明である。昭和55年度箕輪町農業基盤整備事業の対象地となつたため、記録保存のための緊急発掘調査を昭和55年7月15日より約1ヶ月に亘ってその極く1部700m<sup>2</sup>の発掘調査を実施した。調査の結果を要約すれば次の通りである。

1. 本遺跡は、天竜川左岸に形成された河岸段丘（三日町段丘）の1部、南北を天竜川の小支流鏡沢川及び玄ヶ沢川によって開拓された東西800m、南北400mの雑墳上台地の最高所に在り、発掘地点は川のV字谷をひかえた台地端に位置する。
2. 調査の予察段階では、縄文早期の押型文土器に係る遺構として発掘したが、調査結果は予想に反して次の通りである。

(1) 遺構	(2) 遺物
縄文時代後期竪穴式住居址	1軒
配石址	1箇所
古墳時代前期竪穴式住居址	1軒
配石址	6箇所
明治時代特殊土壤	1基
	イ) 縄文時代早期押型文土器片 92点
	ロ) 縄文時代中期土器 2点
	ハ) 縄文時代後期土器 2点
	ニ) 以上に伴う石器類 290点
	ホ) 古墳時代前期土師器 24点
	ヘ) 平安時代土師器及灰釉陶器 5点

以上のうち遺構を伴った縄文時代後期土器(イ)及び古墳時代前期土師器(ホ)以外はすべて散発的な出土状態であり極めて一時的な滞在状態によって包含されたものと認め得る。

次に発掘上の所見について若干記してみたい。

まず第1に縄文時代後期の遺構、特に住居址が配石址を伴って発見されたことである。後期の壙の内II式に属する遺構は、本上伊那都市地域では数少くその立地及び住居様態について今後に對して貴重な資料を提供した。特に土偶を伴った住居址と配石址の在り方は初見というべきで注目しなければならない。

縄文後期の配石址を伴った例は、伊那谷北半部の当地域では、天竜川右岸の伊那市西春近の北部山麓に発見された百駄刈遺跡と天竜川左岸沿線の辰野町権口五反田遺跡である。当遺跡をこれらに比較すると標高720mに位置する点において百駄刈に近く、住居址を伴った点においても同じである。本地域において縄文後期遺跡の存在は極めて乏しいが、かかる山麓の森林地帯に存在するすれば今後注意すべきで、縄文後期人の生活内容を把握する点で大きな課題となる。

当遺跡で最も問題視したいのは、古墳時代前期に営まれた祭祀遺構である。700m<sup>2</sup>の範囲に6箇所の配石があり、この中に土師器の小型丸底壺、高环、壺、甕等を一括埋納した遺構2箇所と竪穴式住居址を伴ったことである。

土師器は、いずれも和泉式に所属する小形丸底壺5箇（第39図～第41図1、4、15、16、17）、高环9箇（同図5、6、7、8、20、21、22、23、24）、小型甕5箇（同図2、3、12、18、19）

大形壺2箇（同図9、11）大形壺1箇（同図10）計26箇でいずれも3箇所から集積埋納された状態で出土した。ひとつは、第1遺物集中区で不整に配置された自然石と共に小型丸底壺1箇、高环2箇、小型壺1箇が集積状態で出土した。玉類や有孔石製品などは全く伴っていなかったが、明らかに祭祀をものがたり簡単な点で農耕民の祭儀を想わせるものがあった。もうひとつは、第2号竪穴住居址内の集中出土である。ここでは、床面近くに小型丸底壺2箇、高环2箇、中型壺1箇、中形壺1箇が器種を別にしておかれた状態で出土した。ここにも玉類は存在せず、また飯塚や焼土、炭化物も認められず、明らかに祭祀的な様相を漂せており、この方形竪穴が、生活的なものではなく、祭祀にかかる斎屋的なものを思わせた。

土師器の形態は、丸底壺といい、高环の脚部の中膨みをもつ状態といい、中形壺の底部が整然と角ばっている点など明らかに関東の古式土師器の系譜を引くものであり、和泉期の所産と断定できるのである。

当郡地域における和泉式土師器の発見は、初見であり、下伊那郡飯田市座光寺所在の恒川遺跡と共に今後の標準となるべき性格をもっている。当郡地域で古式土師器の出土を見たのは、伊那市美篶、堂垣外遺跡の五領式で当遺跡は、この次の段階に位置することになる。引き続く鬼高式のものとして伊那市富県阿原古墳や駒合方形古墳、駒ヶ根市赤須中通古墳のものがあり、今後詳細な検討により伊那谷の土師器編年を確立しなければならない。本遺跡の土師器は、この課題解決にとって貴重な資料を提供することとなった。

また農耕祭祀的な様相をもつ遺跡として南信濃では初見であろう。北信には、長野市街の北端駒沢遺跡において本州最大の規模をもつ祭祀遺構が出土している。駒沢遺跡例は、1箇所に数百箇の古式祭祀用土師器を集積され、土製鏡、ガラス玉、管玉などを伴い古代農耕民の祭祀が盛大であったことを物語っているが、本例は、これに比較すると1箇所数点の土師器の集積で玉類も伴わず極めて簡素小規模なものである。恐らく遺跡地面上より1段下の上棚段丘面や2段下の三日町段丘面に水田農耕の可能な地籍があるので、ここに住んだ5世紀前半の頃の農耕集落の人々が標高720mのこの高位段丘上に神聖な神の降臨地と定め祭儀を執行したものであろう。祭祀の場所としての条件は遺跡の南側直下が暗沢（くらやみざわ）のV字渓谷であり、古代以前においてはこの谷口が開拓されず広く水を湛えていたことが推定される。しかも遺跡に立てば、西方、天竜川の対岸直線14kmの虚空に神奈備形の山容をそびえさせる経ヶ岳（2296.5m）を望むことができる。この2つの条件がここを祭祀の場所と定めたことになると思われる。

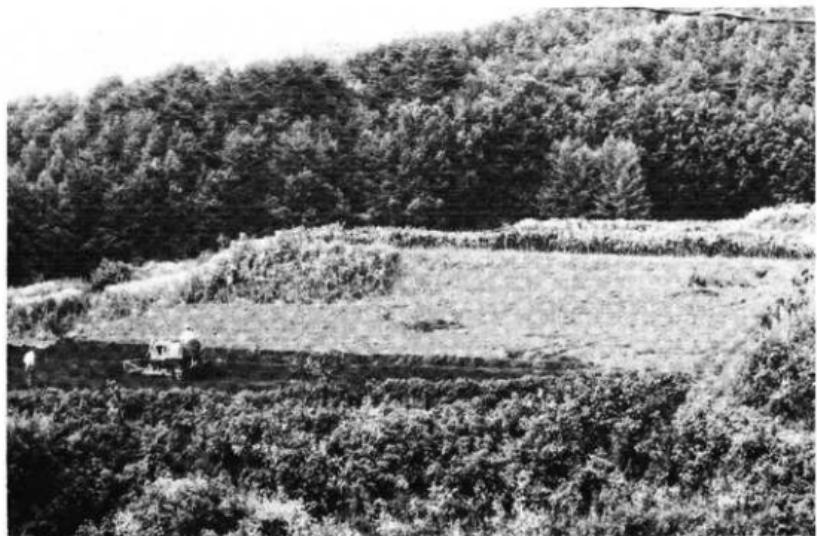
またこの水を湛えた沢の堆積状況は、暗沢谷の段丘面に露頭しており、その故に縄文時代の全期間を通じての人間の痕跡が遺物の出土状態を通じて看取されるのである。

終わりにのぞみ、このように広大でしかもいくつかの重要な遺構を秘めた澄心寺下遺跡が大部分破壊されてしまったことは誠に遺憾であるが、その数パーセントの面積にあたる当発掘地点が詳細に調査され報告書として刊行されたことは、せめてもの慰めである。

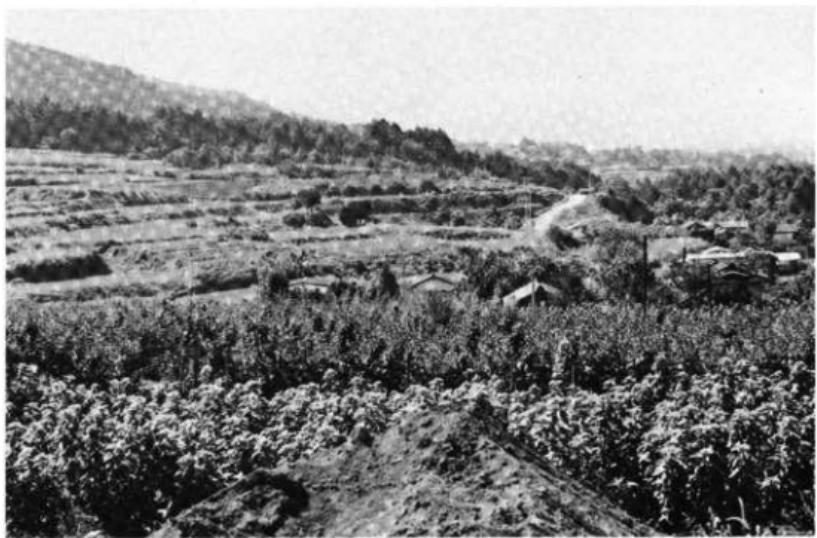
本報告書の作成に努力された箕輪町郷土博物館 柴登巳夫氏（発掘調査主任）同学芸員竹入洋子氏はじめ多くの調査員の御労苦に感謝申し上げたい。

（「調査団長・・・林・茂樹」）

# 図 版



遺跡近景



遺跡遠景

第1回版 発掘区全景



第1号住居址

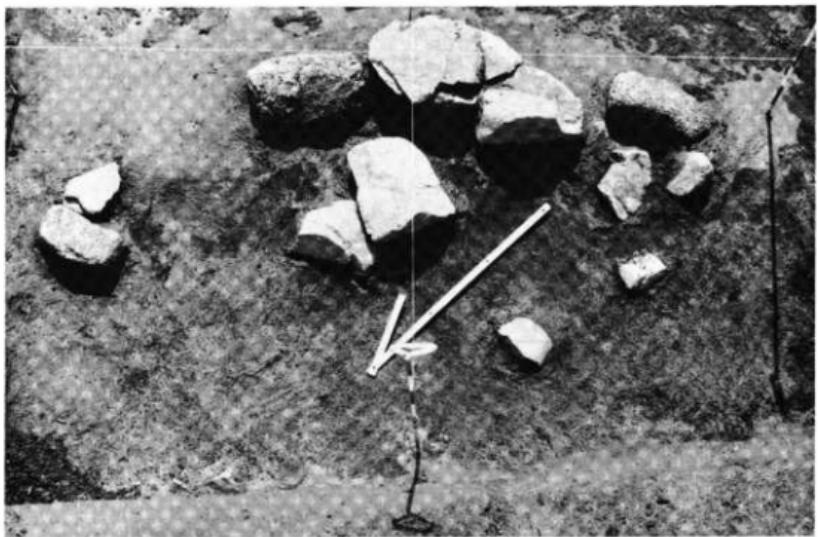


第2号住居址

第2回版 遺構状況(1)



第1配石址



第2配石址

第3図版 造構状況(2)

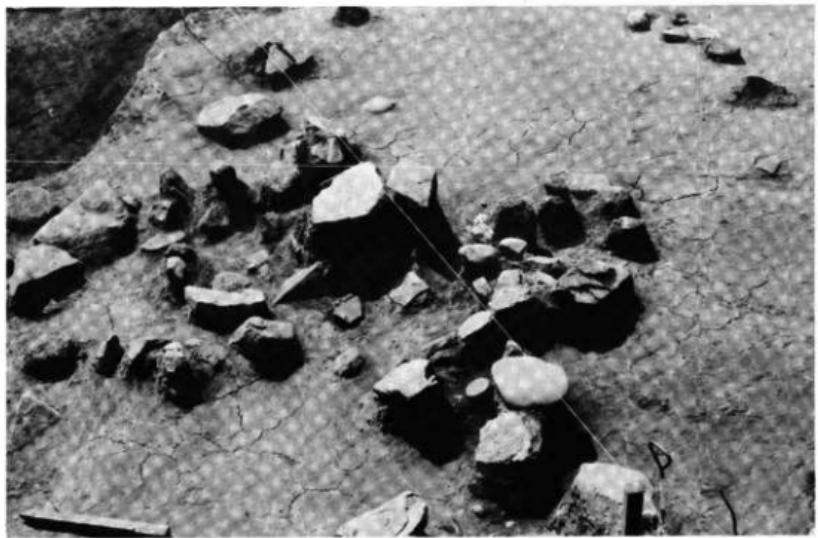


第3配石址

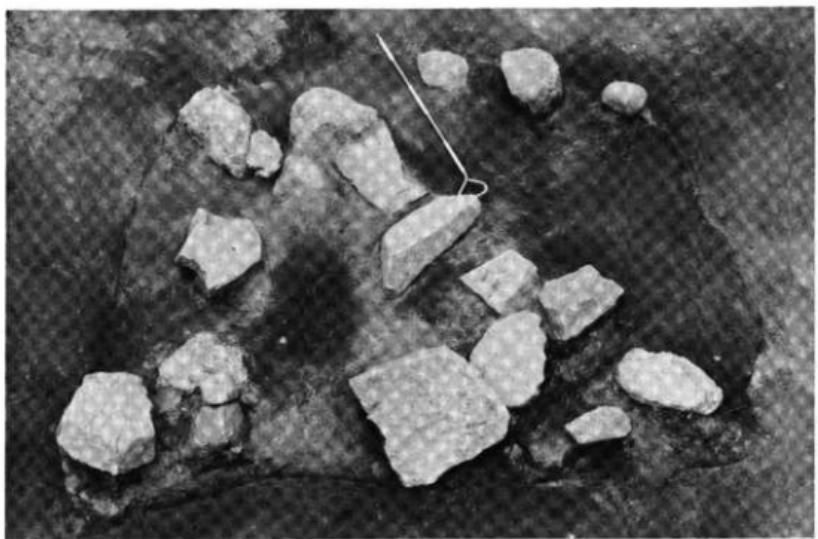


第4配石址

第4回版 遺構状況(3)

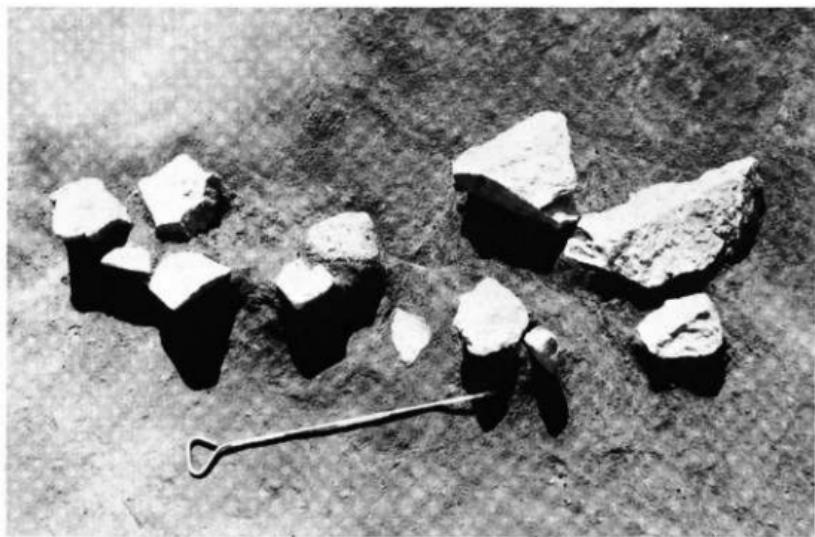


第5配石址

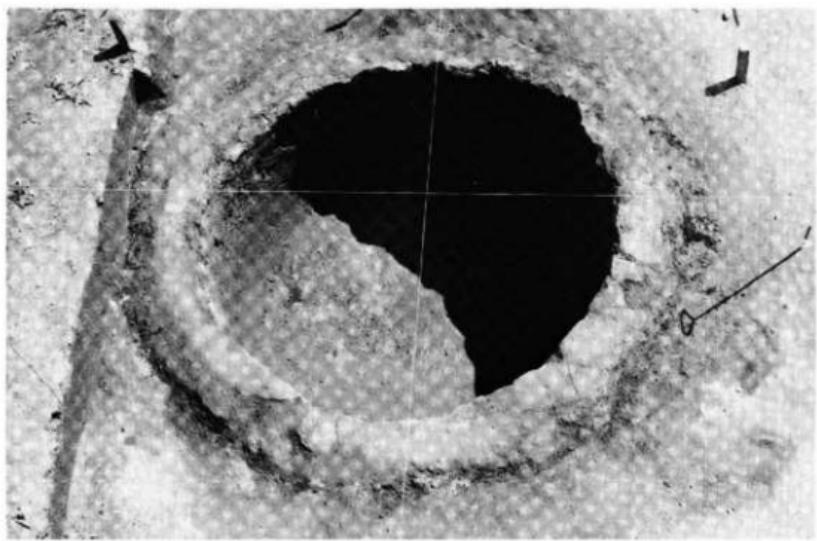


第6配石址

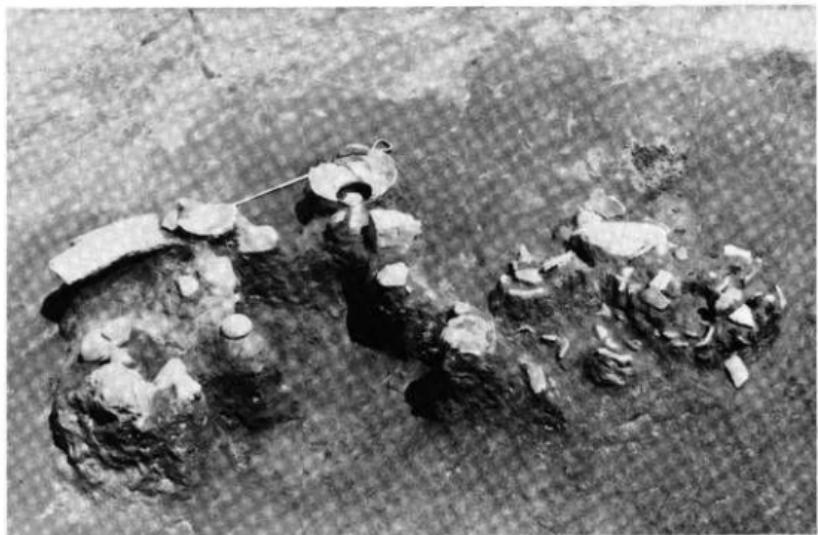
第5回版 造構状況(4)



第8配石址



土 潟



第1 遺物集中区

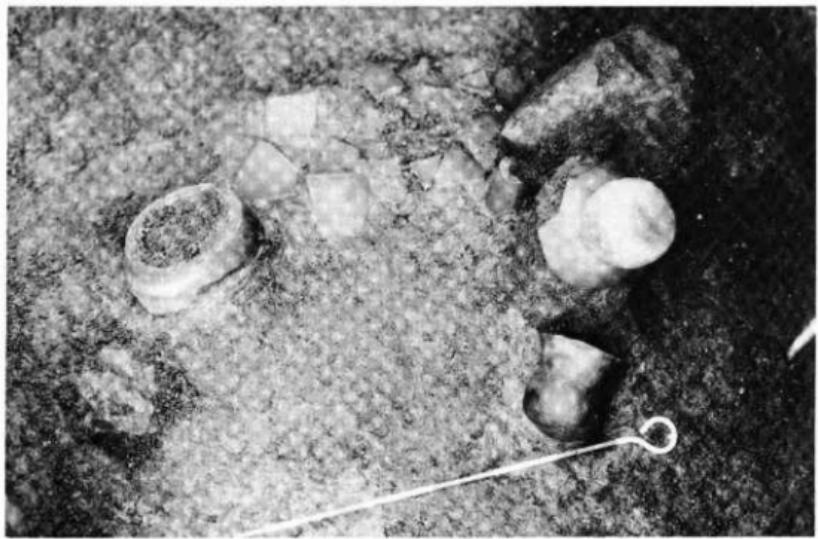


第2 遺物集中区

第7 図版、遺物出土状況(1)



第2号住居址遺物出土状況



第2号住居址遺物出土状況

第8図版 遺物出土状況(2)



神事風景



団長説明風景



発掘風景



測量風景



発掘風景



測量風景



発掘風景



記念撮影



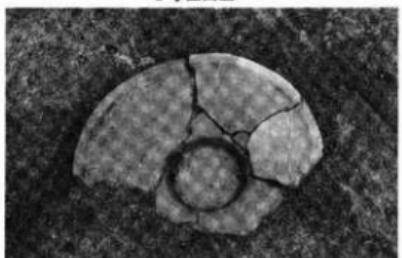
2号住出土



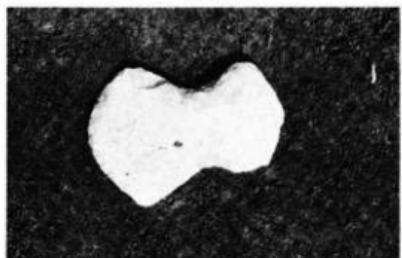
2号住出土



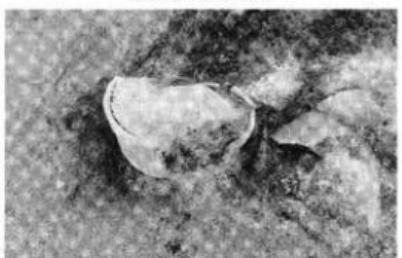
16G



第1号住居址出土



2K



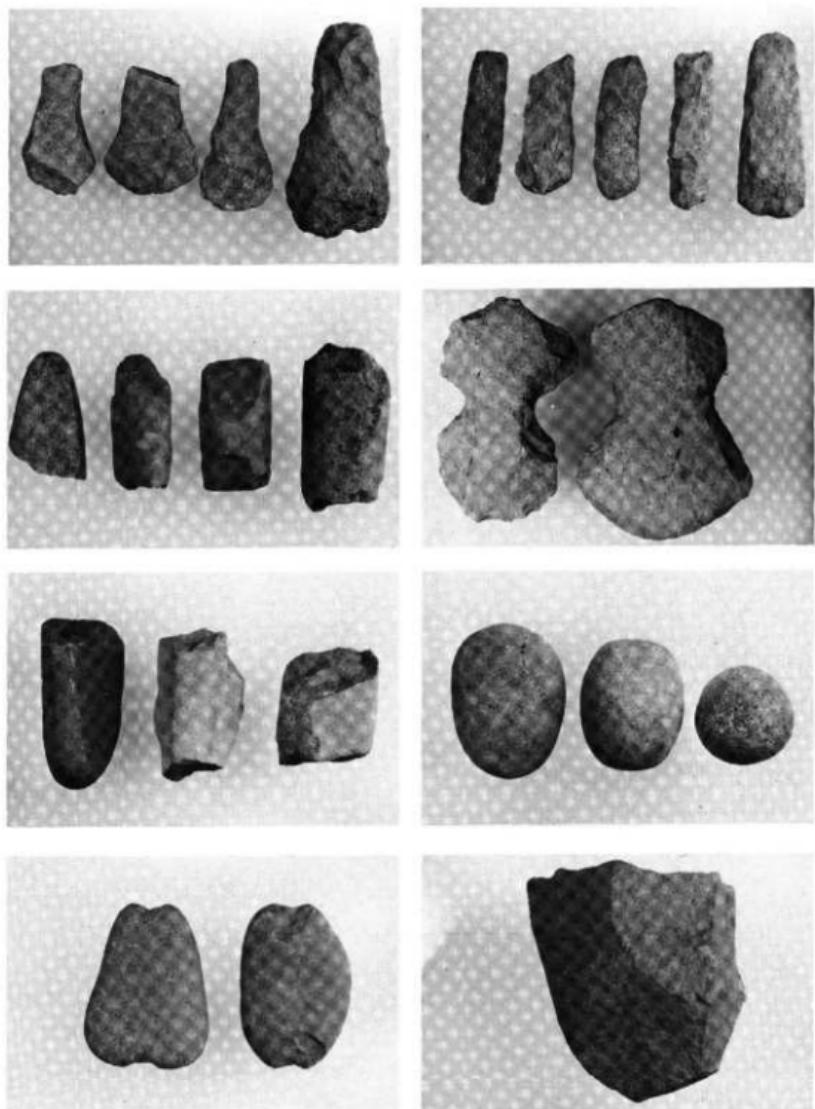
第1号住居址



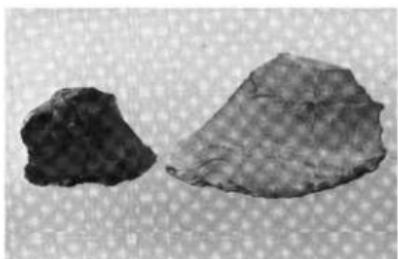
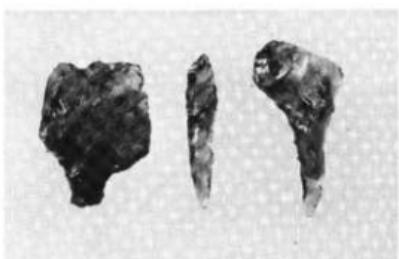
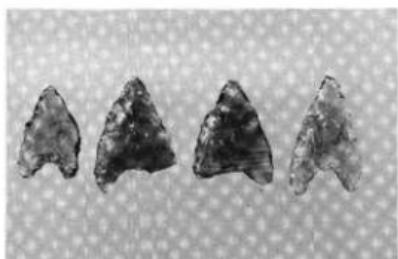
12L



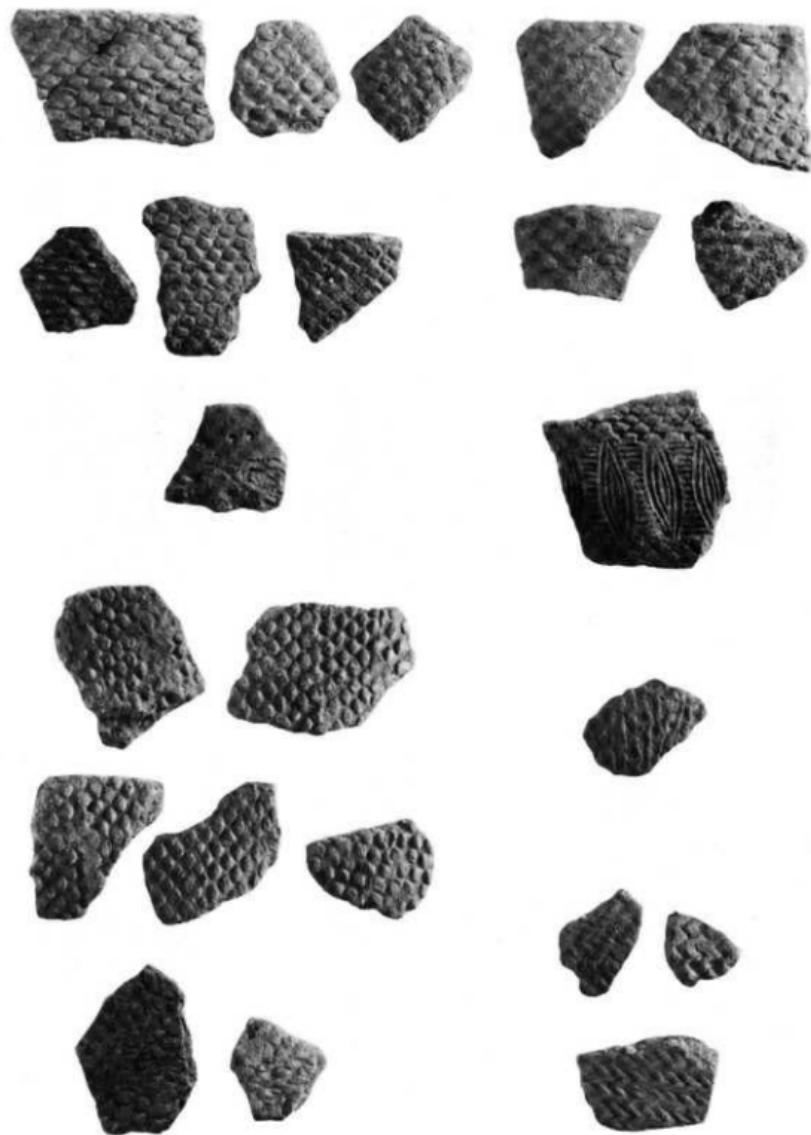
13E



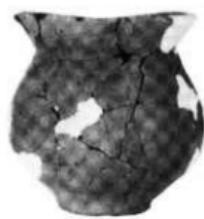
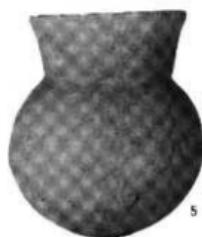
第11図版 出土石器(I)



第12図版 出土石器(2)



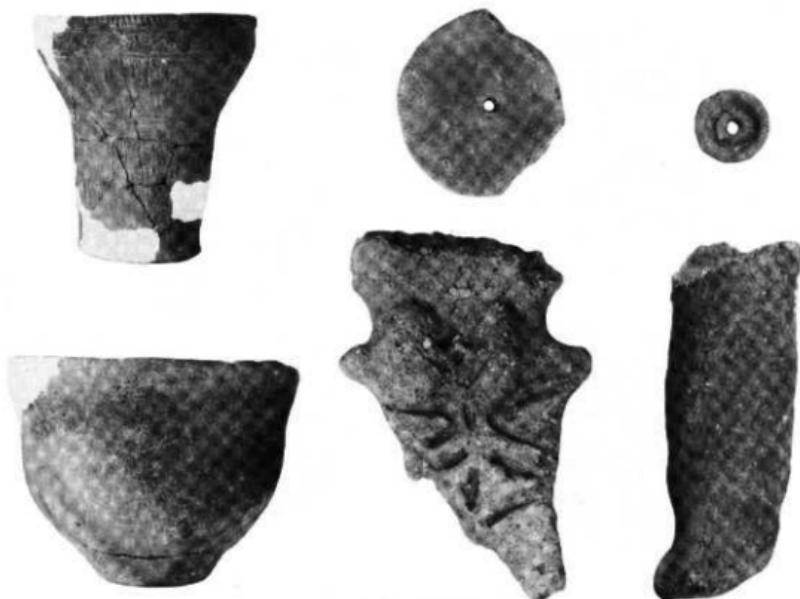
第13図版 出土土器



第14図版 出土土器(1)



第15図版 出土土器(2)



出土土器及び土製品



記念撮影

第16図版

## 澄心寺下遺跡

～緊急発掘調査報告～

昭和56年3月1日 印刷

昭和56年3月20日 発行

発行所 長野県箕輪町教育委員会  
南信土地改良事務所

印刷所 伊那市小松総合印刷所